

大学生の「生きがい感」に影響を及ぼす要因について ～ストレス場面での対処方略の「現実と希望のズレと一致」と 「生きがい感」・「信頼感」・「本来感」・「自尊感情」の関係～

岡林一弘

関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科 心理臨床学専攻

目的

「生きがい」は、人が生きていく上で欠かせないものであるが、その「生きがい」の喪失という問題に直面している人は潜在数も含めてかなりの数になると多くの研究者が指摘している（白石 1997、野田 1998、諸富 2002）。それを裏付けるように、現代日本人の意識調査（NHK 放送文化研究所）の結果を分析した荒牧（2004）は、物質的満足感はこの 30 年間に上昇してきているが、生きがいや人間関係など精神的満足感、物質的満足感ほど上昇しておらず、生きがいは減少傾向を示している、と結論付けている。最新の 2008 年の調査でも、2003 年のデータと数字の差は見られず、生きがいの減少傾向は続いていると考えられる（NHK 放送文化研究所 2008）。

本研究では、それらの現状を踏まえ、「生きがい感」に影響を与えている要因を検討し、さらに対処方略という現実操作しやすい事柄に焦点をあて、現実に行っている方略とその方略を希望する「ズレと一致」と「生きがい感」等への関係を考え、それにより、「生きがい感」向上の糸口を見いだす事を目的とする。

方法

質問紙調査：2009 年 7 月下旬

調査対象者：大阪府内の大学 1～4 年生（252 名 内訳、男性 112 名＜18 歳から 25 歳、平均年齢 19.70 歳＞・女性 140 名＜18 歳から 23 歳、平均年齢 19.31 歳＞）

調査内容：「3 次元モデルにもとづく対処方略」尺度（TAC-24；Tri-Axial Coping Scale）・「信頼感」尺度・「大学生のための生きがい感」尺度・「本来感」尺度・「Rosenberg 自尊感情」尺度・「希望対処方略」尺度

結果と考察

「生きがい感」全体に、「自分への信頼」・「他人への信頼」・「本来感」・「自尊感情」が影響を及ぼす事が確認された。現実に行っている方略とその方略を希望する「ズレと一致」に関しては、「肯定的解釈」や「情報収集」・「計画立案」など、ストレス場面での積極的な解決を図る対処方略で、「現実に行っている方略を希望するしその方略を採りたい」と望んでいる一致群（現実高理想高群）が、「生きがい感」・「信頼感」・「本来感」・「自尊感情」とともに、高いことがわかった。「ストレス場面で、積極的な対処方略を望み使用する」という方向に、自身のありようを変革していく努力が、「信頼感」・「生きがい感」・「本来感」・「自尊感情」を高めることにもつながる可能性が示唆されたとと言える。「生きがい感」向上という漠然とした課題に、現実の対処方略の変容という比較的操作性しやすい角度を提示できたことに、本研究の意義があるのではないかと考えている。

今後、対処方略の現実と希望の「ズレと一致」が「生きがい感」に影響を及ぼす構造の解明が望まれる。

2009 年度

関西福祉科学大学大学院

社会福祉学研究科

心理臨床学専攻

修士論文題目

大学生の「生きがい感」に影響を及ぼす要因について
～ストレス場面での対処方略の「現実と希望のズレと一致」と
「生きがい感」・「信頼感」・「本来感」・「自尊感情」の関係～

指導教員（小林 芳郎）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 20861005 氏名 岡林 一弘

目次

第1章 問題と目的	3
第1節 問題	4
1. 「生きがい」をめぐる現状	4
2. 「生きがい」と「生きがい感」	4
3. 「対処方略」をめぐる議論	5
第2節 目的と研究の展開	7
1. 目的	7
2. 研究の展開	7
1) 予備調査の実施	7
2) 質問紙調査実施	7
第2章 方法	8
第1節 被調査者と手続き	9
1. 被調査者	9
2. 実施時期	9
3. 手続き	9
第2節 実施内容	10
1. 事前調査と事前調査にもとづく検討	
その実施内容と目的	10
2. 使用した尺度について	10
1) 「3次元モデルにもとづく対処方略」尺度 (TAC-24 ; Tri-Axial Coping Scale)	10
2) 「信頼感」尺度	11
3) 「大学生のための生きがい感」尺度	11
4) 「本来感」尺度	12
5) 「Rosenberg 自尊感情」尺度	13
6) 「希望対処方略」尺度	13
第3章 結果と考察	14

第1節	生きがい感に影響を及ぼす要因	15
1.	結果	15
1)	性差の検討	15
2)	生きがい感に影響を及ぼす要因の検討	15
2.	考察	19
第3節	希望対処方略と実際使用対処方略の「一致とズレ」が 生きがい感・信頼感・本来感・自尊感情に及ぼす影響	20
1.	結果	20
2.	考察	26
第4章	総合考察と今後の課題	28
第1節	総合考察	29
第2節	今後の課題	29
要約		30
謝辞		32
引用文献・参考文献		34
資料		40

第 1 章 問題と目的

第1節 問題と目的

1. 「生きがい」をめぐる現状

「生きがいについて」を著した精神科医の神谷（1961）は「わざわざ研究などしなくても、はじめからいえることは、人間がいきいきと生きて行くためには、生きがいほど必要なものはない、という事実である。」と述べている。この断定的表現について、荻野（1971,1977）は、「なんと押し付けがましい意見なのだろう」と嫌悪感さえ抱いているが、神谷の著作を研究した鶴田（1999）は、神谷は自身の結核や癌との闘病という「限界状況」体験、そして、精神科医としてハンセン氏病の隔離施設であった国立療養所長島愛生園に赴くようになって、ハンセン氏病という「限界状況」の中を生きる患者の人達と関わる中で「生きがい」という点について考察を深めた、としている。前述の神谷の言葉は、彼女の臨床体験から実感された言葉といえる（武田 1997）。様々な立場と主張はあるが、「生きがい」の有無は、人が充実した生を営む上で、重要な役割を果たしていることは疑えない事実であろう。

しかし、その「生きがい」の喪失という問題に直面している人は潜在数も含めてかなりの数になると多くの研究者が指摘している（見田 1970、宮城 1971、塹江 1981、斉藤 1993、白石 1997、野田 1998、諸富 2002a, 諸富 2002b）。それを裏付けるように、現代日本人の意識調査（NHK 放送文化研究所）の結果を分析した荒牧（2004）は、物質的満足感はこの 30 年間上昇してきているが、生きがいや人間関係など精神的満足感ほど上昇しておらず、生きがいは減少傾向を示している、と結論付けている。最新の 2008 年の調査でも、2003 年のデータと数字の差は見られず、生きがいの減少傾向は続いていると考えられる（NHK 放送文化研究所 2008）。この「生きがい」の減少傾向を、Frankl（1998）は、＜生きる意味＞の喪失と捉え、「時代の病・苦しみ」と表現している。

2. 「生きがい」と「生きがい感」

家政学の立場から、充実感・生きがい・幸福感・満足感を構成する年齢別要因を研究した有元ら（1997）は、若年男性（25～29 歳）では「充実感」と「生きがい感」をほぼ同等に考えていることを明らかにし、そして、その「生きがい」を規定する外的要因を検討し、「家族」「友人」「趣味」「仕事」など、様々、生きがいを規定する要因を明らかにしている。しかし、その内的要因を研究した例は少ない。わずかに、大学生の信頼感と生きがい感の関係を研究した丸一（2007）の例や、大学生における生きがい感と自己効力感の関連（村松 2007）の例が挙げられる程度である。一方、主体的幸福感や¹well-beingとその内的要因との関連性を扱った例は多数見られる（和田 1995、寺崎 1999、斉藤 2000、伊藤 2005,2006）。

近藤（2007）は、生きがい感と主体的幸福感とは極めて似た概念であるとし、しかし、主体的幸福感は受動的、消極的なニュアンスを持ち、相対的で主に過去か

¹ well-being は幸福感と訳される事が多い。本研究でも well-being をその意味合いで捉える。

ら現在にかけての心の状態を問う概念となり、それに対し生きがい感は、他者と比較して生きがいを感じたり、失ったりする面はない。また、生きがい感は過去にこだわらず、将来を含めた自分の生き方や生活に対する積極的、主体的な意識であり、それは主に現在から未来へ向けての心の姿勢ではなかろうか、と先行研究（吉森 1992、植田他 1992、Diener 1984、和田 1990、磯部 1965、多田 1989、前田 1980、小川 1982、石井 1997、三喜田 1978、神谷 1980）を比較検討した上で述べている。主体的幸福感は生きがい感に比べ、外的要因に左右される度合いが大きいとの知見である。

生きがいについて鶴田（2004）は太平記や近松作品、先行研究者による哲学的考察を通して、生きがいを「生きる目標・目的、生きる価値・意味・理由、生きる喜び・張り合い・充実感（すなわち生きがい感）を統合した概念である」と定義している。本論では、生きがいをこの定義に沿って捉える。

一方、生きがいと生きがい感の違いを指摘する識者も多い。（神谷 1966、近藤 2007）ほとんどの場合、生きがいの対象が生きがいに影響を与えているという関係になっているからである。したがって、その定義を論じようとする以上、研究対象は生きがい感の方になってくる。

生きがい感の定義について近藤（2007）は、今まで議論を以下の 5 つの分類に分けている。

- ①生きがい感の対象には社会的価値が含まれている。またそのように推定できる定義。
- ②社会的価値には触れていない定義。
- ③社会的価値とは無関係とした定義。
- ④自己実現、またはそれを含めた定義。
- ⑤人生の意味と目的であるとした定義。

その上で、基本的なところで多数の研究者は大きな間違いを犯していると指摘する。それは、生きがい感の主観だ、ということを忘れていた点である。生きがい感とは社会的価値基準や善悪の判断を超えて、感じるものだといっているのである。そして、その考えに基づき（③の立場）「現状満足感」因子・「人生享楽」因子・「存在価値」因子・「意欲」因子の 4 因子からなる「大学生の生きがい感スケール」を作成している。そして「生きがい感」を「自分の存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲をもつ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にも感じられるもの」と定義している。

その定義で捉えられた「生きがい感」は、いかなる心理的要素に支えられているものなのだろうか。主体的幸福感や well-being の研究でその形成要因と言われてきた「信頼感」「自尊感情」「本来感」は、「生きがい感」についても言えるものなのだろうかを検証する必要性を感じる。

3. 対処方略をめぐる議論

コーピング（coping；対処）は、心理学的ストレス理論において、「ストレスサ一を処理しようとして意識的に行われる認知的努力（行動および思考）」と定義さ

れている (Lazarus & Folkman, 1984)。ストレス対処の分類を実証的に行った研究の先駆とされるのは、Folkman,&Lazarus(1980)による情動焦点型と問題焦点型の分類である。神村ら (1995) は、その後の、Billings & Moos (1981)及びMoos & Billings (1982)、Billings & Moos (1984)、Endler & Parker (1990)、Cohen (1987)等の研究を概観し、対処方略の分類に、「問題に積極的に関わる」の軸が指摘され、この軸上の対極か、あるいはまた他の軸として、「問題でなく情緒の安定を志向する」傾向や「問題を回避する」傾向の存在を確認したうえで、Tobin,et al (1989)の、²engagementとdisengagementという用語による分類、Holahan & Moos (1987) が提唱している反応系の分類を組み合わせ、「焦点軸」・「接近—回避軸」・「反応系軸」の3軸で分類される8因子で構成される対処方略の捉え方を考案している。その8因子は、

- ① 肯定的解釈 (関与・情動焦点・認知)
- ② カタルシス (関与・情動焦点・行動)
- ③ 回避的思考 (回避・情動焦点・認知)
- ④ 気晴らし (回避・問題焦点・行動)
- ⑤ 計画立案 (関与・問題焦点・認知)
- ⑥ 情報収集 (関与・問題焦点・行動)
- ⑦ 放棄・諦め (回避・問題焦点・認知)
- ⑧ 責任転嫁 (回避・問題焦点・行動)

の8つである。

ストレス場面で、人間は、何らかの対処を採る。しかし、現実には採っている対処が必ずしも望んでいる対処ではない。望む対処方略と現実には採っている対処方略の間には「ズレ」が生じるものである。この「ズレ」がいかなる影響を及ぼすのかについての先行研究を見出すことができなかった。

そのことを、希望と現実のギャップと捉えると、その「ズレ」が、自己効力感・自尊感情等に影響を与えることは、Deci,E.L. & Ryan,R.M.(1995) や、Denice Lawrence (2006)の指摘からも頷ける。自分が望むように現実が推移しないことは、自身の能力について、疑念を抱かせる要因となり、それが自己効力感の低下を招き、「自分に対する信頼」を失わせ、自尊感情の低下を招く。

望む対処方略と現実にとっている対処方略、この組み合わせが、人の心理的諸要因にどのように作用しているのか。その点を考察することにどのような意義があるのだろうか。望む対処方略が現実にとれている人が、そうでない人より、高い「生きがい感」「信頼感」「本来感」「自尊感情」を持っているという結果が指摘できれば、漠然としている「生きがいの喪失」解消の糸口を見いだせるのではないだろうか。そのような問題意識のもとに、当研究を進めることとした。

また、望む対処方略と実際に採っている対処方略の一致には2種類あると考えられる。それは、高いレベルでの一致と、低いレベルでの一致の2種類である。同じ

² この次元は、かかわる対象 (具体的問題か、自己の情緒か) についてではなく、その関わり方 (積極的か、回避的に関わるか) の次元を分類するための軸を捉えたものである。

一致でも、この2種類には大きな開きが出ることが想定される。この点に関しても、先行研究の存在を確認することが出来なかった。

故に、本研究において、「希望する対処方略と実際に使用している対処方略の一致とズレ」が、「生きがい感・信頼感・本来感・自尊感情に及ぼす影響」を検討する意義があるのではないかと考えた。

第2節 目的

1. 目的

研究は、現代大学生の生きがい感を近藤（1998）に従い「自分の存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲をもつ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にも感じられるもの」と定義し、主体的幸福感よりも内的要因が作用しやすいとされる「生きがい感」を取り上げ、主体的幸福感に作用するとされる本来感や自尊感情（伊藤 2005）が、生きがい感の内的規定要因としても作用するのか、そして、人が豊かな社会的生活を営む上で非常に重要な、自他に対する信頼感（天貝 1995）も生きがい感に影響があるのかを検討した。

さらに、ストレス場面で採りたいと望んでいる対処方略と実際採っている対処方略の「ズレと一致」が、「生きがい感」「信頼感」「本来感」「自尊感情」にどう影響するのかを見ていく。

「生きがい感」を増す要因として、対処方略を理想に近づける、という現実には操作しやすいものが浮かびあがってくれば、「理想と現実の対処方略のギャップを埋めることが「生きがい感」向上に有効である」との研究の基礎となると言える。

2. 研究の展開

1) 予備調査の実施

2009年2月から6月下旬にかけて、大学院生30名を対象に、予備調査を行い、その結果にもとづき質問紙調査の項目に不備がないかを、担当教員と大学院生6人により検討した。

2) 質問紙調査実施

7月下旬、K大学において、「3次元モデルにもとづく対処方略」尺度（TAC-24；Tri-Axial Coping Scale）・「信頼感」尺度・「大学生のための生きがい感」尺度・「本来感」尺度・「Rosenberg 自尊感情」尺度・「希望対処方略」尺度からなる、質問紙調査を実施した。

第 2 章 方法

第1節 被調査者と手続き

1. 被調査者

本研究の対象は大学生である。生きがいや生きがい感といった言葉は、既存の研究では、老年期によく使用されるが、実際は、青年期にその概念は成立することは、藤原（1972）、五味（1978）、秋山（1978）、森下（1987）などが指摘している。青年期はエリクソンの発達理論によれば、アイデンティティの確立がなされようとする重要な時期である、大学生の年代にあたる18～22歳ごろは、ちょうど、青年前期（または、³成人化期）に位置づけられ、進路や職業選択等で、生き方を見つめ始める時期であり、個人が社会とのかかわりにおいて自己概念を内在化させ確立していく時期である（伊藤,1993）。本研究では、この生きがいという概念が成立するとされる年代の大学生を対象とする。

本研究では、大阪府内の大学生252名が対象。

252名中、男性112名（18歳から25歳、平均年齢19.70歳）・女性140名（18歳から23歳、平均年齢19.31歳）。

2. 実施時期

7月中旬、大阪府内の大学の講義時間内で実施。

3. 手続き

質問紙調査票を配布し（巻末資料参照）、注意事項を説明した後、講義時間内の20分間を利用して記入。

全270名分を配布し、252人が回答（回収率、93.33%、欠損データなし）。

（質問紙調査票の一部）

調査4） 以下にある文章は自分に対してどのように感じているかを表したものです。それぞれの文章について、あなた自身にどの程度あてはまるかを5段階から1つ選んで○をつけてください。

	記入例) どちらでもないと思った場合(ややあてはまりもせず、かといって、ややあてはまらないわけでもない、あてはまるとあてはまらない中間に位置する感覚。 わからない、答えられないとは違います) 5 4 3 2 1 3に○	あてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	ややあてはまらない	あてはまらない
1	いつも自分らしくいられます	5	4	3	2	1
2	いつでも揺るがない「自分」をもっています	5	4	3	2	1

³ emerging adulthood (Arnett,2000)の訳語で、独自の生計を営む社会人になるまでの準備期間という意味合い。

3	人前でもありのままの自分が出せます	5	4	3	2	1
4	他人と自分を比べて落ち込むことが多くあります	5	4	3	2	1
5	自分のやりたいことができます	5	4	3	2	1
6	これが自分だ、と実感できるものがあります	5	4	3	2	1
7	いつも自分を見失わないでいられます	5	4	3	2	1

第2節 実施内容

1. 事前調査と事前調査にもとづく検討

その実施内容と目的

事前に、質問項目の妥当性を検討するため、指導教官を交え大学院生6名により、質問紙調査票の検討を行った。その後、大学院生30名にサンプル調査を実施し、意見を頂くとともに、再度、指導教官を交え大学院生6名により、質問紙調査票の妥当性の検討を行った。(各尺度で検討した点は、「2. 実施した尺度の構成」で述べる。)

2. 使用した尺度

1) 「3次元モデルにもとづく対処方略(TAC-24; Tri-Axial Coping Scale)」尺度

神村ら(1995)によれば、コーピングの尺度作成を試みた従来の研究では、自由記述にもとづく項目群を探索的に因子分析する場合が多いが、一般的に採用頻度や内容のバリエーションが大きすぎ、特定の因子・カテゴリーに偏った尺度構成になりやすい。そこでこの「3次元モデルにもとづく対処方略尺度」では、先行研究をふまえコーピングの分類次元として3つの軸を設定し、それらの組み合わせで構成される8つの現れのそれぞれに対応した項目群による8下位尺度から構成されている。3つの軸とは、①「問題焦点—情動焦点」軸。つまり「狙いとしているのは具体的問題解決か、あるいは情動調整か」(鈴木・嶋田・神村、2000の表記では「焦点軸」)・②「接近—回避」軸。つまり「積極的に関わる態度か回避あるいは無視して距離を置こうとする態度か」(鈴木・嶋田・神村、2000の表記では「方向軸」)・③「反応系」軸。つまり「機能は認知系か行動系か」(鈴木・嶋田・神村、2000の表記では「表出軸」)、である。これらの組み合わせによる8下位尺度とは、

- ① 肯定的解釈 (関与・情動焦点・認知)
- ② カタルシス (関与・情動焦点・行動)
- ③ 回避的思考 (回避・情動焦点・認知)
- ④ 気晴らし (回避・問題焦点・行動)
- ⑤ 計画立案 (関与・問題焦点・認知)
- ⑥ 情報収集 (関与・問題焦点・行動)
- ⑦ 放棄・諦め (回避・問題焦点・認知)

⑧ 責任転嫁 (回避・問題焦点・行動)

である。

上述の3軸8因子に該当する項目が3つずつ、計24項目で構成。対象者の制限は特にないが、項目や選択肢の内容からみて高校生ないし大学生以上の成人向けの尺度と言える。

教示文は、「精神的につらい状況に遭遇した時、その場を乗り越え、落ち着くために、あなたは普段から、どのように考え、どのように行動するようにしていますか。各文章に対して、自分がどの程度あてはまるか、以下の基準に基づき評定し、5から1の数字に○をつけてください」とし、5件法<1;そのようにしたこと(考えたこと)はこれまでにない。今後も決してないだろう。 2;ごくまれにそのようにしたこと(考えたこと)がある。 3;何度かそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後も時々はそうするだろう。 4;しばしばそのようにしたこと(考えたこと)がある。今後も度々そうするだろう。 5;いつもそうしてきた(考えてきた)。今後もそうするだろう。>で回答する。本来の5件法の選択文は上記の通りだが、今回の研究では、望んでいる対処方略と実際に今とっている対処方略の「一致、ズレ」を見るため、「今後も云々」の個所を削り、5件法の選択文を<1;そのようにしたこと(考えたこと)はこれまでにない。 2;ごくまれにそのようにしたこと(考えたこと)がある。 3;何度かそのようにしたこと(考えたこと)がある。 4;しばしばそのようにしたこと(考えたこと)がある。 5;いつもそうしてきた(考えてきた)。>とすることを、担当教員と大学院生6名の協議し決定した。

2)「信頼感」尺度

天貝(1995;1997)によって作られた、対人的信頼感を多次元的に測定するための尺度である。天貝(1999)は「人や自分自身を安心して信じ、頼ることができるという気持ち」と定義し、信頼感を「自分への信頼」「他人への信頼」「不信」の3側面から測定することで、青年期前期から老年期にかけての信頼感の発達の变化を検討している。今回の対象者は大学生(18歳~25歳)ということで、24項目、6件法の「信頼感」尺度を使用した。

次の教示文<次の文章を読み、あなたの気持ちや考えに最も近いところ(非常によくあてはまるは「6」、あてはまるは「5」、少しあてはまるは「4」、余りあてはまらないは「3」、あてはまらないは「2」、全くあてはまらないは「1」)に○をつけてください。>を示し、6件法で回答するものとした。

3)「大学生のための生きがい感」尺度

近藤・鎌田(1998)によって作られた、現代大学生の生きがい感、すなわち、「自分の存在を意識し、現状に満足し、生きる意欲を持つ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にも感じられるもの」を測定する尺度である。

生きがい感という言葉は、老年期研究においてよく使用される言葉であるが、実際は青年期より成立する概念であるということを、藤原(1972)、五味(1978)、

秋山（1978）、森下（1987）など多くの研究者がその点を指摘している。実際に、青年期の若者を対象にした生きがい意識調査が総務庁や新聞社などにより数多く行われているが、それらの調査項目の選択基準は明確ではない。また、生きがい感の概念定義自体も、臨床家の経験にもとづくもの（小川、1982）や心理学者が自身の理論にもとづいて構成したもの（宮城、1971；西平、1979）が多く、実証的検討が十分でない。

こうした見地から、近藤・鎌田（1998）は自由記述調査を出発点として大学生が考える素朴な生きがい感概念の抽出を試み、特定の価値観を含まない項目で、4つの下位尺度からなる「大学生のための生きがい感尺度」を構成した。

4つの下位尺度は、①現状満足・②人生享楽・③存在価値・④意欲の4つである。担当教員と6人の大学院生の協議の中で、31項目からなる質問項目の妥当性を検討したところ、尺度作成途中の因子分析結果（オブリミン回転）で因子負荷量が低いものも質問項目に含まれているのではないかと、という疑問が呈された（因子分析結果は、巻末資料参照）。故に、この度の尺度構成では、因子負荷量0.40以下の8項目は、尺度構成から除外した。

除外した8つの質問項目と、その因子負荷量は、以下の通りである。

「人生享楽」因子

私は心ゆくまで買い物をすることがあります・・・・・・・・・・因子負荷量 0.39

世界がバラ色に輝いて見えることがあります・・・・・・・・・・因子負荷量 0.39

今日は一日好きなことができると思う日がよくあります・・・・・・・・因子負荷量 0.31

「存在価値」因子

私は今まで知らなかった新しい自分を発見することがあります・因子負荷量 0.36

努力した結果報われたと感じることがよくあります・・・・・・・・因子負荷量 0.35

「意欲」因子

夢中になって好きなことをしていることがよくあります・・・・・・・・因子負荷量 0.35

私は現在自分の能力を精一杯発揮しています・・・・・・・・・・因子負荷量 0.35

自分の趣味や好きなことに出会えることがよくあります・・・・・・・・因子負荷量 0.32

以上の8項目を除外し、「現状満足」因子5項目・「人生享楽」因子3項目・「存在価値」因子9項目・「意欲」因子6項目からなる尺度とした。

「以下のそれぞれの項目について、あなた自身にあてはまる程度を、6段階（非常によくあてはまるは6、あてはまるは5、少しあてはまるは4、余りあてはまらないは3、あてはまらないは2、全くあてはまらないは1）から選んで数字に○をつけてください。」を教示文とし、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法から、調査後の統計解析を考慮して、「1；全くあてはまらない 2；あてはまらない 3；余りあてはまらない 4；少しあてはまる 5；あてはまる 6；非常によくあてはまる」の6件法に改めた。

4)「本来感」尺度

本来感（Sense of Authenticity）とは、個人が自分らしくあると全般的に感じている程度を指す。（伊藤・小玉 2006）本来感は古くから心理臨床の実践におい

て重要視されてきた概念であり、2000年代に入ってから、人間の well-being や自尊感情の内実を考慮する上で重要な概念として再認識されつつある (Harter,2002 ; 伊藤・小玉,2005 ; Kernis,2003a,2003b)。伊藤・小玉 (2005) は、自尊感情と共変動している本来感が、自律性を促進させるとし、その本来感を測る尺度を作成した。

「以下にある文章は自分に対してどのように感じているかを表したものです。それぞれの文章について、あなた自身にどの程度あてはまるかを 5 段階から 1 つ選んで○をつけてください。」を教示文とし、5 件法< 5 ; あてはまる 4 ; ややあてはまる 3 ; どちらでもない 2 ; ややあてはまらない 1 ; あてはまらない>で回答するものとした。

5) 「Rosenberg 自尊感情」尺度

Rosenberg (1965) により作成された、自尊感情尺度の 10 項目を、山本・松井・山成が邦訳したものを使用した。

自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである。Rosenberg (1965) は、自尊感情を、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度であると考えている。また、自信を「非常によい(very good)」と感ずることではなく、「これでよい(good enough)」と感ずる程度が、自尊感情の高さを示すと考えており、自尊感情の低さは、自己拒否・自己不満足・自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味するとしている。

「以下の特徴について、あなた自身にどの程度あてはまるかを 5 段階でお答えください。 他からどう見られているかではなく、あなたが、あなた自身をどのように思っているかを、ありのままにお答えください。」を教示文とし、5 件法<< 5 ; あてはまる 4 ; ややあてはまる 3 ; どちらでもない 2 ; ややあてはまらない 1 ; あてはまらない>で回答するものとした。

6) 「希望対処方略」尺度

1) で述べた、「3 次元モデルにもとづく対処方略 (以下、TAC-24 ; Tri-Axial Coping Scale と表記)」尺度は、現在とっている対処方略を問うものであった。

この TAC-24 を使い、ストレス場面で、どういう対処方略を取りたいのかを測る尺度を作成するために、担当教員と 6 人の大学院生との協議を行い、教示文と質問項目の順番の並べ替えをした。

「精神的につらい状況に遭遇した時、その場を乗り越え、落ち着くために、あなたはどのような対処を望みますか？以下の項目について、望む程度を、5 段階 (望むは 5、少し望むは 4、どちらとも言えないは 3、余り望まないは 2、望まないは 1、) から選んで数字に○をつけてください。」を教示文とし、5 件法< 5 ; 望む 4 ; 少し望む 3 ; どちらとも言えない 2 ; 余り望まない 1 ; 望まない>で回答するものとした。

第3章 結果と考察

第1節 生きがい感に影響を及ぼす要因の検討

1. 結果

1) 性差の検討

信頼感の下位尺度「自分への信頼・他人への信頼・不信」、生きがい感の下位尺度「現状満足・人生享楽・存在価値・意欲」、本来感、自尊感情について、それぞれを男性群（N=112）と女性群（N=140）に分けて、t 検定を行った。その結果、自分への信頼・他人への信頼・不信・現状満足・人生享楽・存在価値・意欲・本来感・自尊感情のすべての項目で、「男女の差がない」という帰無仮説が1%水準により棄却されなかった（性差t 検定の表は、巻末資料を参照）。

2) 「生きがい感」に影響を及ぼす要因の検討

「現代大学生の生きがい感」の下位因子である「現状満足」・「人生享楽」・「存在価値」・「意欲」それぞれに、「信頼感」の下位因子である、「自分への信頼」・「他人への信頼」・「不信」と「本来感」・「自尊感情」がどう影響しているのかを見るために、重回帰分析を行った。そして、「生きがい感」全体に、「信頼感」の下位因子である、「自分への信頼」・「他人への信頼」・「不信」そして、「本来感」「自尊感情」がどう影響しているのかを見るために、重回帰分析を行った。

「現状満足」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析を行った結果、

R²乗は、0.507 F=50.558 で、有意確率が0.000（ $p<0.01$ ）であり、1%水準で求めた重回帰式は予測に役立つことが分かる。各独立変数の偏回帰係数の検定を見ていくと、

「本来感」のt値は1.430で、有意確率は0.154（ $p>0.05$ ）

「自尊感情」のt値は3.926で、有意確率は0.000（ $p<0.01$ ）

「自分への信頼」のt値は2.144で、有意確率は0.033（ $p<0.05$ ）

「他人への信頼」のt値は3.359で、有意確率は0.001（ $p<0.01$ ）

「不信」のt値は-1.617で、有意確率は0.107（ $p>0.05$ ）

従って、5%水準で重回帰の予測に役立つ独立変数は、「自尊感情」・「自分への信頼」・「他人への信頼」の3つである（表1参照）。

（表1）「現状満足」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数	有意確率
自分への信頼	0.169	0.033*
他人への信頼	0.231	0.001**
不信	-0.091	0.107

本来感	0.084	0.154
自尊感情	0.285	0.000**

R² 乗=0.507 F(246, 5)=50.558 p=0.000<0.01

**=p<0.01 *=0.01<p<0.05

「人生享楽」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析を行った結果、

R² 乗は、0.337 F(246,5)=24.980 で、有意確率が 0.000 (p<0.01) であり、1%水準で求めた重回帰式は予測に役立つことが分かる。各独立変数の偏回帰係数の検定を見ていくと、

「本来感」の t 値は 1.744 で、有意確率は 0.082 (p>0.05)

「自尊感情」の t 値は 0.732 で、有意確率は 0.465 (p>0.05)

「自分への信頼」の t 値は 1.098 で、有意確率は 0.273 (p>0.05)

「他人への信頼」の t 値は 4.686 で、有意確率は 0.000 (p<0.01)

「不信」の t 値は-0.377 で、有意確率は 0.707 (p>0.05)

従って、5%水準で重回帰の予測に役立つ独立変数は「他人への信頼」である（表 2 参照）。

（表 2）「人生享楽」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数	有意確率
自分への信頼	0.101	0.273
他人への信頼	0.373	0.000**
不信	-0.025	0.707
本来感	0.119	0.082
自尊感情	0.062	0.465

R² 乗=0.337 F(246, 5)=24.980 p=0.000<0.01

**=p<0.01 *=0.01<p<0.05

「存在価値」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析を行った結果、

R² 乗は、0.662 F(246,5)=96.342 で、有意確率が 0.000 (p<0.01) であり、1%水準で求めた重回帰式は予測に役立つことが分かる。各独立変数の偏回帰

係数の検定を見ていくと、

「本来感」の t 値は 2.561 で、有意確率は 0.011 ($p < 0.05$)

「自尊感情」の t 値は 6.304 で、有意確率は 0.000 ($p < 0.01$)

「自分への信頼」の t 値は 2.563 で、有意確率は 0.011 ($p < 0.05$)

「他人への信頼」の t 値は 5.317 で、有意確率は 0.000 ($p < 0.01$)

「不信」の t 値は 0.608 で、有意確率は 0.543 ($p > 0.05$)

従って、5 %水準で重回帰の予測に役立つ独立変数は、「本来感」・「自尊感情」・「自分への信頼」・「他人への信頼」の 4 つである（表 3 参照）。

（表 3）「存在価値」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数	有意確率
自分への信頼	0.168	0.011*
他人への信頼	0.302	0.000**
不信	0.028	0.543
本来感	0.125	0.011*
自尊感情	0.378	0.000**

R^2 乗 = 0.662 $F(246, 5) = 96.342$ $p = 0.000 < 0.01$

** = $p < 0.01$ * = $0.01 < p < 0.05$

「意欲」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析を行った結果、

R^2 乗は、0.587 $F = 70.062$ で、有意確率が 0.000 ($p < 0.01$) であり、1 %水準で求めた重回帰式は予測に役立つことが分かる。各独立変数の偏回帰係数の検定を見ていくと、

「本来感」の t 値は 2.639 で、有意確率は 0.009 ($p < 0.01$)

「自尊感情」の t 値は 3.282 で、有意確率は 0.001 ($p < 0.01$)

「自分への信頼」の t 値は 5.141 で、有意確率は 0.000 ($p < 0.01$)

「他人への信頼」の t 値は 2.297 で、有意確率は 0.022 ($p < 0.05$)

「不信」の t 値は -0.369 で、有意確率は 0.022 ($p < 0.05$)

従って、5 %水準で重回帰の予測に役立つ独立変数は、「本来感」・「自尊感情」・「自分への信頼」・「他人への信頼」・「不信」の 5 つである（表 4 参照）。

(表4)「意欲」因子を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数	有意確率
自分への信頼	0.372	0.000**
他人への信頼	0.144	0.022*
不信	-0.019	0.712
本来感	0.142	0.009**
自尊感情	0.218	0.001**

R² 乗=0.587 F(246, 5)=70.062 p=0.000<0.01

**=p<0.01 *=0.01<p<0.05

「生きがい感」全体を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析を行った結果、

R² 乗は、0.689 F=108.875 で、有意確率が 0.000 (p<0.01) であり、1 % 水準で求めた重回帰式は予測に役立つことが分かる。各独立変数の偏回帰係数の検定を見ていくと、

「本来感」の t 値は 2.860 で、有意確率は 0.005 (p<0.01)

「自尊感情」の t 値は 5.292 で、有意確率は 0.000 (p<0.01)

「自分への信頼」の t 値は 3.872 で、有意確率は 0.000 (p<0.01)

「他人への信頼」の t 値は 5.123 で、有意確率は 0.000 (p<0.01)

「不信」の t 値は-0.478 で、有意確率は 0.633 (p>0.05)

従って、5 %水準で重回帰の予測に役立つ独立変数は、「本来感」・「自尊感情」・「自分への信頼」・「他人への信頼」の 4 つである (表 5 参照)

(表 5)「生きがい感 (現状満足・人生享楽・存在価値・意欲の合計)」を従属変数とし、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼・不信」を独立変数とした、重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数	有意確率
自分への信頼	0.243	0.000**
他人への信頼	0.279	0.000**
不信	-0.021	0.633

本来感	0.134	0.005**
自尊感情	0.305	0.000**

R² 乗=0.689 F(246, 5)=108.875 p=0.000<0.01

**=p<0.01 * =0.01<p<0.05

2. 考察

まず、共通して言えることは、「不信」因子は「生きがい感」の形成には意味を持つとは言えないという点である。自他を信頼しえないという感情は、現状を肯定的に捉えられない時に起こるものであり、そういう場面では、自分に対する満足感・自分に価値を見出す事・意欲的に物事に取り組もうとする事は起こりにくいと言える。

次に、大学生の生きがい感を構成している「人生享楽」因子は、「他人への信頼」が寄与しているという結果がでたが、環境や他者への信頼があるが故に、安心して人生を楽しめるという関係性がうかがえる。

「現状満足」因子・「存在価値」因子・「意欲」因子には、「自尊感情」・「自分への信頼」・「他人への信頼」がそれぞれ影響していると考えられる。遠藤（1992）によると、自尊感情が高いということは人が自分自身を尊敬し、価値ある人間であると考え、自分自身の成長や改善の期待と限界を知っていることを意味し、自尊感情が低いことは自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を示しており、自分が観察している自己に対して尊敬を欠いていることを意味していると述べている。このことから、天貝（2001）は、自尊感情の高い人は自分に対する信頼が高く、自尊感情の低い人は自分に対する信頼が低いことを予想しているが、今回の結果は、その予想を裏づけるものである。自尊感情の高さと自分への信頼の高さには関係があり、自分への信頼が基盤となり、そこから、自分が自分らしいと感じる感覚＝「本来感」が、「存在価値」・「意欲」などにも影響を与えるといえる。特に、「意欲」因子に「本来感」は強く作用している。これは、自己の確立が自身の精神的基盤となり、その基盤があるがゆえに「意欲」が湧くという関係にあるからであろう。

「自分への信頼」・「他者への信頼」ともに基本的信頼から派生したものである（天貝,2001）、自分への信頼が高い人は、全般的に他人への信頼も高い事が指摘されている（天貝,1995）。「現状満足」因子・「存在価値」因子で「他人への信頼」が強い影響力をもっているのは、他者を信頼できる現状が影響を与えているのではないだろうか。

「生きがい感」全体には、「本来感・自尊感情・自分への信頼・他人への信頼」が強い影響を与えていることがわかった。主体的幸福感や Well-being の研究でその形成要因と言われてきた「信頼感」「自尊感情」「本来感」は、「生きがい感」についてもその形成の要因となっていると言える。

第2節 希望対処方略と実際使用対処方略の「ズレと一致」が

生きがい感・信頼感・本来感・自尊感情に及ぼす影響の検討

1. 結果

「TAC-24」・「希望する対処方略」尺度の結果から、8つの下位因子の平均値を算出し、各々の平均以下の数値の群を「低群」とし「1」を割り振り、平均以上の数値の群を「高群」とし「2」を割り振った。そして「TAC-24」の「低群1」と「高群2」・「希望する対処方略」尺度の「低群1」と「高群2」の組み合わせにより、4つの群に群分けした。

その4つの群とは、①その対処方略を「実際に採っている得点が低く、その対処方略を採りたいと希望している得点が低い」群＝「現実低理想低」群（「11」と略号）②その対処方略を「実際に採っている得点が低く、その対処方略を採りたいと希望している得点が高い」群＝「現実低理想高」群（「12」と略号）③その対処方略を「実際に採っている得点が高く、その対処方略を採りたいと希望している得点が低い」群＝「現実高理想低」群（「21」と略号）④その対処方略を「実際に採っている得点が高く、その対処方略を採りたいと希望している得点が高い」群＝「現実高理想高」群（「22」と略号）、である。

この4つの群の間で、「信頼感」の下位因子である「自分への信頼・他人への信頼・不信」・「生きがい感」の下位因子である「現状満足・人生享楽・存在価値・意欲」・「本来感・自尊感情」に及ぼす影響に違いがあるのかをみるため、一元配置の分散分析を行った。

以下の（表6）～（表13）が、一元配置の分散分析をし、その後の検定で、Tukey法により多重比較を行い、平均値の差に5%水準以下で有意差が出た項目とその数値である。

（表6）「肯定的解釈」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I) 群1	(J) 群1	平均値の差(I-J)	有意確率
自分への信頼	11	22	-6.36	0.000
	12	22	-5.325	0.000
	21	22	-4.747	0.000
他人への信頼	11	22	-8.066	0.000
	12	22	-5.677	0.000
	21	22	-5.716	0.000
不信	11	22	6.726	0.000
	12	22	4.503	0.037

	21	22	6.539	0.001
現状満足	11	22	-6.912	0.000
	12	22	-5.618	0.000
	21	22	-4.512	0.000
人生享楽	11	12	-1.426	0.048
	11	22	-3.041	0.000
	12	22	-1.615	0.016
	21	22	-1.803	0.008
存在価値	11	22	-9.047	0.000
	12	22	-6.26	0.000
	21	22	-6.135	0.000
意欲	11	22	-7.869	0.000
	12	22	-5.869	0.000
	21	22	-5.269	0.000
本来感	11	22	-4.863	0.000
	12	22	-4.63	0.000
自尊感情	11	22	-6.645	0.000
	12	22	-5.572	0.001

(表 7) 「カタルシス」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I) 群 2	(J) 群 2	平均値の差 (I-J)	有意確率
自分への信頼	11	22	-2.607	0.022
他人への信頼	11	21	-3.385	0.019
	11	22	-5.313	0.000
現状満足	11	22	-2.456	0.041
人生享楽	11	22	-1.69	0.003

	12	22	-1.797	0.039
存在価値	11	22	-5.787	0.000
自尊感情	12	22	-5.192	0.027

(表 8) 「回避的思考」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I) 群 3	(J) 群 3	平均値の差 (I-J)	有意確率
自分への信頼	12	22	-3.059	0.033
他人への信頼	11	22	-3.089	0.023
現状満足	11	21	-2.885	0.034
	11	22	-3.11	0.004
	12	22	-3.365	0.014
人生享楽	11	22	-1.465	0.016
	12	22	-1.765	0.018
存在価値	11	22	-3.804	0.046
	12	21	-5.07	0.049
	12	22	-5.736	0.007
意欲	12	21	-4.48	0.018
	12	22	-4.281	0.010
本来感	12	21	-4.185	0.004
	12	22	-3.825	0.003
自尊感情	12	21	-4.955	0.033

(表 9) 「気晴らし」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I)群 4	(J)群 4	平均値の差(I-J)	有意確率
自分への信頼	11	22	-2.963	0.005
	12	22	-3.345	0.005
他人への信頼	11	22	-5.579	0.000
	21	22	-4.49	0.006
不信	11	22	4.878	0.005
人生享楽	11	22	-2	0.000
	12	22	-1.897	0.002
	21	22	-2.341	0.001
存在価値	11	22	-4.941	0.003
	12	22	-4.617	0.021
	21	22	-5.092	0.040
意欲	11	22	-3.659	0.006
	12	22	-3.793	0.013
本来感	11	22	-3.153	0.002
	12	22	-3.008	0.014
自尊感情	12	22	-3.891	0.046

(表 1 0) 「計画立案」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I) 群 5	(J) 群 5	平均値の差 (I-J)	有意確率
自分への信頼	11	22	-4.149	0.000
	12	22	-3.434	0.002
	21	22	-3.654	0.021
他人への信頼	11	22	-4.779	0.000
不信	21	22	7.401	0.003
現状満足	11	22	-2.688	0.019
存在価値	11	22	-7.544	0.000
	21	22	-5.784	0.021
意欲	11	22	-5.664	0.000
	12	22	-3.865	0.005
	21	22	-5.282	0.004
本来感	11	22	-3.536	0.001
自尊感情	11	22	-4.463	0.005

(表 1 1) 「情報収集」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I) 群 6	(J) 群 6	平均値の差 (I-J)	有意確率
自分への信頼	11	22	-2.491	0.029
他人への信頼	11	22	-4.151	0.000
	12	22	-3.573	0.021
現状満足	11	22	-3.096	0.004

人生享楽	11	22	-1.911	0.000
存在価値	11	22	-6.197	0.000
	12	22	-5.757	0.003
	21	22	-5.543	0.010
意欲	11	22	-3.003	0.035
	21	22	-3.795	0.036
本来感	11	22	-2.456	0.033
自尊感情	11	22	-3.887	0.017

(表 1 2) 「放棄・諦め」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I) 群 7	(J) 群 7	平均値の差 (I-J)	有意確率
各群			平均値に 有意差出ず	

(表 1 3) 「責任転嫁」の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数との関係

従属変数	(I) 群 8	(J) 群 8	平均値の差 (I-J)	有意確率
不信	11	22	-5.72	0.001

2. 考察

まず「不信」に関しては、「責任転嫁」方略において、現実低理想低の 11 群と現実高理想高の 22 群との間で平均値に有意差が出ているが、「肯定的解釈」方略・「気晴らし」方略・「計画立案」方略で出た有意差と異なり、「責任転嫁」方略では、実高理想高の 22 群の平均値が低くなっている。これは、「責任転嫁」方略が 3 次元モデルでは、「回避・問題焦点・行動」に位置する方略であり、それを測るための

設問項目が「自分は悪くないと言い逃れをする・責任を他の人に押し付ける・口から出まかせを言って逃げ出す」という、倫理的にあまり採りたくはないし、採るべき行動ではないと判断されるものだからであろう。三次元モデルでは同じ構造をもつ「気晴らし」方略では、現実低理想低の 11 群と現実高理想高の 22 群で、22 群の平均値が 11 群よりも高くなっている事が、設問項目に対する倫理的判断が回答を左右する要因になっている可能性を示唆している。

次に、「肯定的解釈」方略だが、「自分への信頼」・「他人への信頼」・「現状満足」・「存在価値」・「意欲」・「本来感」・「自尊感情」と、「人生享楽」以外のすべての従属変数で現実低理想低の 11 群・現実低理想高の 12 群と現実高理想高の 22 群との間で平均値に有意差が出ており、22 群のほうが得点の平均値が高い。11 群と 22 群の平均値の差の方が、12 群と 22 群の平均値の差より大きくなっていることから、現実には採っている対処方略と採りたいと望んでいる対処方略が高い数値レベルで一致している方が、「信頼感・生きがい感・本来感・自尊感情」を測る数値は高くなると言える。現状を把握し積極的な問題解決を図ろうとする「情報収集」方略・「計画立案」方略にもほぼ同様の結果がでており、精神的健康の維持に関して、積極的な問題解決が役立つとする Lazarus & Folkman (1984) の理論と整合性がある。その点に着目して、「放棄・諦め」方略と「責任転嫁」方略の結果を見てみると、現実低理想低の 11 群と現実高理想高の 22 群との間で平均値に有意差は出ていないものの、積極的に関与しようという方略と違い、現実低理想低の 11 群の方が、「自分への信頼」・「他人への信頼」・「現状満足」・「存在価値」・「意欲」・「本来感」・「自尊感情」で現実高理想低の 21 群・現実高理想高の 22 群より、平均値が高くなっている。「放棄・諦め」方略と「責任転嫁」方略は、3 次元モデルによれば「回避・問題焦点」の表出系が「認知なのか行動なのか」という違いを持ったよく似た方略である。実際に、「TAC-24」作成過程では、因子分析（主成分解）で、Oblimin 解（斜交解）では 8 つの因子に分類されたが、Varimax（直交解）では、同一の因子としてまとめられる分類をされていた（神村,1995）。この結果から、困難や問題を回避する対処に関しては、現実はその行動を採っておらず、かつ、回避的な行動をとらないことを望んでいる人が「生きがい感」が高いと言える。

次に、「カタルシス」方略だが、現実低理想低の 11 群と現実高理想高の 22 群との間で平均値に有意差が出ている従属変数は、「自分への信頼」・「他人への信頼」・「現状満足」・「人生享楽」・「存在価値」であり、「意欲」と「本来感」には有意差が認められず、「自尊感情」には、現実低理想高の 12 群と現実高理想高の 22 群との間で平均値に有意差が出た。カタルシスとは、感情を表に出すことによって気持ちを晴らしたり、誰かに話しを聞いてもらい気持ちを静めたりすることであり、3 次元モデルでは、「関与・情動焦点・行動」に位置する方略である。他者が関与することから、実際に方略を採っている群（現実高理想低の 21 群・現実高理想高の 22 群）が、「他者への信頼」が高いと言う結果が出ているのは当然である、とともに、「カタルシス」という他者への積極的な感情の表出は、人間としてあっていいものだとの許容が社会全体として根付いてきている結果とも言える。

最後に、「回避的思考」方略だが、現実低理想低の 11 群と現実高理想高の 22 群

との間で平均値に有意差が出ている従属変数は、「他人への信頼」・「現状満足」・「人生享楽」・「存在価値」・「本来感」であり、現実高理想高の 22 群の方が、平均値がいずれも高い。それとともに、現実低理想高の 12 群と現実高理想高の 22 群との間で平均値に有意差が出ている従属変数が「自分への信頼」・「現状満足」・「人生享楽」・「存在価値」・「意欲」・「本来感」であり、いずれも現実高理想高の 22 群の方が、平均値が高い。回避的思考の設問項目を見てみると「嫌な事を頭に浮かべないようにする・そのことをあまり考えないようにする・無理にでも忘れようとする」であり、いずれも、回避的ではあるが、常識的に考えてそのような対処を採る方が得策な場面が多いとされる対処方略である。現実には採れていない群が、この対処方略を採ればもっと楽になるのと思う気持ちが、この結果に表れているように思う。回避的な対処方略でも、現実的な選択肢として採って良いと判断されれば、現実高理想高群が「生きがい感」の高さとリンクすると言える。

全体的に考察をすると、現実には積極的な方略を採っており、かつ、そのような積極的な方略を採りたいと望んでいる「高いレベルでの一致群」が、「信頼感」・「生きがい感」・「本来感」・「自尊感情」といった内的要因に関連することが示されていると言える。

第4章 総合考察と今後の課題

第1節 総合考察と結論

「生きがい感」は、多面的な要素からなる概念であり今回の研究はその一側面にしか過ぎない。しかし、well-beingの研究で言われている「自尊感情」・「信頼感」・「本来感」の影響は、「生きがい感」を考える上でも役立つことがわかった。さらに、現実には積極的な方略を採っており、かつ、そのような積極的な方略を採りたいと望んでいる「高いレベルでの一致群」が、「自尊感情」・「信頼感」・「本来感」・「生きがい感」に強い関係性を持つという結果も出た。

人がイキイキと生きるためには、経済的・社会的側面は無視できないものである。しかし、そこから得られる「生きがい感」・「幸福感」は、相対的なものである。アウシュビッツの強制収容所での体験を綴った Franklの「夜と霧」(1961)の中でも描かれたように、外的な状況がどうあれ、自身の内的要因に根差した「生きがい感」・「幸福感」は、持続的な作用を持つ可能性が高い。「自身のストレス場面で、積極的な対処方略を望み使用する」という方向に、自身のありようを変革していく努力が、「信頼感」・「生きがい感」・「本来感」・「自尊感情」を高めることにもつながる可能性が示唆されたとも言える。

「生きがい感」向上という漠然とした課題に、現実の対処方略の変容という比較的操作しやすい角度を提示できたことに、本研究の意義があるのではないかと考えている。

第2節 今後の課題

本研究では、対処方略の「ズレと一致」が「信頼感」・「生きがい感」・「本来感」・「自尊感情」に及ぼす影響を見ただけに留まり、その構造を究明するまでには至っていない。「自身のストレス場面で、積極的な対処方略を選択しそのように望むこと」こういう方向に自身のありようを変革していく努力が、「信頼感」・「生きがい感」・「本来感」・「自尊感情」を高めることにもつながるであろうという結論も、裏を返せば「信頼感」・「生きがい感」・「本来感」・「自尊感情」が高い故に、積極的な方略を採っているし望んでいるのだ、とも言える。この点に関しては、今後、検討していくべき課題であり、全体がどういう構造を持っているのかを究明する必要がある。とともに、どういう働きかけが積極的な対処方略へ人を向かわしめるのかという角度の研究が必要となる。

要約

「生きがいについて」を著した精神科医の神谷（1980）は「わざわざ研究などしなくても、はじめからいえることは、人間がいきいきと生きて行くためには、生きがいほど必要なものはない、という事実である。」と述べている。この言葉は、彼女の臨床体験から実感された言葉といえる（武田 1997）。様々な立場と主張はあるが、「生きがい」の有無は、人が充実した生を営む上で、重要な役割を果たしていることは疑えない事実であろう。

しかし、この「生きがい」を感じにくい社会になっていることが、種々の調査により明らかになってきている。「生きがい」の喪失は「時代の病」という様相さえ呈している。

一方、生きがいと生きがい感の違いを指摘する識者も多い。（神谷 1966、近藤 2007）ほとんどの場合、生きがいの対象が生きがいに影響を与えているという関係になっているからである。故に、本研究では、「生きがい感」をテーマとして扱った。そして、「生きがい感」を「自分の存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲をもつ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にも感じられるもの」と定義し（近藤、2007）、その「生きがい感」に影響する要因と、「生きがい感」と、その「生きがい感」に影響を及ぼす「信頼感」・「本来感」・「自尊感情」に対して、ストレス場面での対処方略の希望と現実の「ズレと一致」がどういう関係にあるのかを調べることを目的として研究を進めた。

その結果、「生きがい感」全般に、「信頼感」・「本来感」・「自尊感情」が強く影響を及ぼしていることがわかり、ストレス場面での、対処方略の希望と現実の「ズレと一致」については、積極的な対処方略の場合、現実と希望が高いレベルで一致している群が、他の群より、「生きがい感」・「信頼感」・「本来感」・「自尊感情」が高い事がわかった。相互の関係が指摘できたことで、現実には操作しやすい対処方略に対する働きかけが「生きがい感」の向上に影響を及ぼす可能性が示唆された。

今回の結果では、双方向の関係しか指摘できず、「生きがい感」・「信頼感」・「本来感」・「自尊感情」と対処方略の希望と現実の「ズレと一致」の作用の仕方については明確なことは言えない。今後は、全体の構造を究明する必要がある。

謝辭

本論文を作成するにあたり、多くの方にご支援、ご協力を頂きました。最後に謝辞を述べさせていただきます。

まず、質問紙調査にご協力頂きました。先生方と大学生の皆様方、貴重なお時間を割いてのご協力、ありがとうございました。

また、2年間ともに学び、励ましてくださった大学院生の皆様、ありがとうございました。

そして、基礎的な部分から、懇切丁寧にご指導してくださり、陰に陽に励まし続けてくださった修士課程の指導教官である小林芳郎先生。心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

また、2年間、授業や実習などでご指導頂いた、関西福祉科学大学の先生方に、深く感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

引用・参考文献

(A)

- Alain 1928 「幸福論」
(邦訳：斎藤慎子 2007 アランの幸福論 ディスカヴァー)
- 秋山 登代子 1978 「現代青年の生きがいと生き方」 吉田 昇(編) 現代青年の意識と行動 NHKブックス p 145～173
- 上里 一郎 2006 「思春期の自己形成」 ゆまに書房
- 天貝 由美子 1995 「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」
教育心理学研究, 43, 364～371
- 天貝 由美子 1997 「成人期から老年期に渡る信頼感の発達」
教育心理学研究, 45, 79～86
- 天貝 由美子 1999 「一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因」
教育心理学研究, 47, 229～238
- 有元 典子 1997 「充実感・生きがい・幸福感・満足感を構成する年齢別要因」
日本家政学会誌 vol.48 no.2 113～121
- 荒牧 央 2004 「現代日本人の意識構造(6)」 NHK放送文化研究所編

(B)

- Billings, A.G., & Moos, R. 1981 「The role of coping responses and social resources in attenuating the stress of life events」 Journal of Behavioral Medicine, 4, 139～157
- Billings, A.G., & Moos, R. 1984 「Coping, stress, and social resources among adults with unipolar depression.」
Journal of Personality and Social Psychology, 46, 877～891
- Buber, M. 1979 「我と汝」 岩波書店
- Buber, M. Rogers, C.R. 2007 邦訳：山田邦男 「対話」

(C)

- Cohen, F. 1987 「Measurement of coping」 283～305

(D)

- Deci, E.L., & Ryan, R.M. 1995 Human autonomy : The basis for true self-esteem.
- Denice Lawrence 2006 「Enhancing Self-Esteem in the Classroom」 (邦訳：小林 芳郎訳 2008 教室で自尊感情を高める～人格の成長と学力の向上をめざして～ 田研出版株式会社)
- Diener, E. 1984 「Subjective well-being」
psychological Bulletin, 95, 542～575
- 土居 健郎 1975 「＜甘え＞雑稿」 弘文堂

(E)

Endler,N.S.,&Parker,J.D. 1990 「Multidimensional assessment of coping」
Journal of Personality and Social Psychology,58,844~854

遠藤 辰雄 (編) 1992 「セルフ・エスティームの心理学」 ナカニシヤ出版

(F)

Frankl,V.E. 1961 「夜と霧」 みすず書房

Frankl,V.E. 1993 「それでも人生にイエスと言う」 春秋社

Frankl,V.E. 1998 「＜生きる意味＞を求めて」 春秋社

藤原 喜悦 1972 「生きがいの探究」 金子書房 p 57~103

(G)

五味 義夫 1978 「生きがいを求めて」 有斐閣 p 147~158

(H)

Harter.S 2002 「Authenticity」 London:Oxford University Press.
Pp366~381

塹江 清志 1981 「現代日本人の生きがい」 酒井書房

(I)

伊藤 正哉・小玉 正博 2006 「大学生の主体的な自己形成を支える自己感情
の検討」 教育心理学研究, 5 4,222~232

伊藤 正哉・小玉 正博 2005 「自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が
Well-being に及ぼす影響の検討」
教育心理学研究, 5 3,74~85

磯部 忠正 1965 「若い世代のための人生論」 講談社 p 79

石井 留美 1997 「主観的幸福感研究の動向」
コミュニティ心理学研究, (1),94~107

(K)

Kernis,M.H 2003a 「Optimal self-esteem and authenticity」 Psychological
Inquiry, 1 4,83~89

Kernis,M.H 2003b 「Toward a conceptualization of optimal self-esteem」

神村 栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 1995
「対処方略の三次元モデルと新しい尺度（TAC-24）の作成」 教
育相談研究, 3 3,41~47

神谷 美恵子 1961 「生きがいについて」 みすず書房

神谷 美恵子 1974 「こころの旅」 日本評論社

小林 司 1990 「現代の生きがい」 弘文堂

近藤 勉 1997 「生甲斐感への一考察」 発達心理学研究, 6,11~20

近藤 勉・鎌田 次郎 1998 「現代大学生の生きがい感とスケール作成」
発達心理学研究, 1 1, 73~82

近藤 勉 2007 「生きがいを測る」 ナカニシヤ出版

(L)

Lazarus& Folkman, 1984 Stress, appraisal and coping. New York:Springer

(M)

Maslow.A.H. 1998 「完全なる人間」 誠心書房

Moos,R.& Billings,A.G. 1982 「Conceptualizing and measuring coping
resources and processes」
New York:Free Press

前田 大作 1980 「壮年・老年期の異常心理」 新曜社 p 231

三喜田 龍次 1978 「老人の余暇と生きがい」 ジェリスト増刊総合特集

丸一 れいり 2007 「大学生の信頼感と生きがい感の関係」
臨床教育心理学研究, 3 3, No1

見田 宗介 1970 「現代の生きがい」 日本経済新聞社

宮城 音弥 1971 「日本人の生きがい」 朝日新聞社

村松 智子 2007 「大学生における生きがい感と自己効力感の関連について」
臨床教育心理学研究, 3 3, No1

森下 高治 1987 「青年の進路と生きがい」 神戸 忠夫（編）青年心理学
ナカニシヤ出版 p 188~195

諸富 祥彦 1997 「フランク心理学入門 どんな時も人生には意味がある」
コスモス・ライブラリー

諸富 祥彦 1997 「カール・ロジャーズ入門 自分が自分になるということ」
コスモス・ライブラリー

諸富 祥彦 2002a 「生きがい発見の心理学（上）」 日本放送出版協会

諸富 祥彦 2002b 「生きがい発見の心理学（下）」 日本放送出版協会

溝上 慎一 1999 「自己の基礎理論」 金子書房

(N)

中村 雄二郎 1992 「臨床の知とは何か」 岩波書店

中村 雄二郎 1995 「21世紀問題群」 岩波書店

西平 直喜 1979 「青年期における発達の特徴と教育」 岩波書店

西平 直喜 1998 「魂のアイデンティティ」 金子書房

野田 正彰 1998 「生きがいシェアリング」 中央公論社

(O)

小川 猛 1982 「実践老人心理学」 黎明書房

荻野 恕三郎 1971 「生甲斐の構造と批判」 南窓社

- 荻野 恕三郎 1977 「生甲斐無用の論」 南窓社
小此木 啓吾 1998 「モラトリアム国家・日本の危機」 詳伝社

(R)

- Rosenberg,M 1965 「Society and adolescent self-image.」 Princeton Univ.Press

(S)

- 斎藤 啓一 2003 「ブーバーに学ぶ」 日本教文社
斉藤 茂太 1993 「現代サラリーマンの生活と生きがい」 ミネルヴァ書房
斎藤 誠一・瀧野 揚三 1988 「青少年の Self-Esteem の特質とその規定要因
(5) —高校入試合格発表時の生活感情との関連の検討—」
日本心理学会第 52 回大会発表論文集 2 3
斉藤 嵩・海塚 敏郎 2000 「青年期における幸福感の構造についての一考察」
広島修大論集,41,No2,349~359
清水 幾太郎 2000 「倫理学ノート」 講談社
鈴木 伸一・嶋田 洋徳・神村 栄一 2000 「ストレス対処行動測定尺度の階
層構造」日本健康心理学会第 1 3 回大会発表論文集, 154~155
鈴木 有美 2002 「自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神
的健康」 長野大学紀要 2002,Vol,49,145~155
白石 浩一 1993 「生きがいの心理学」 海竜社

(T)

- 多田 敏子 1989 「病弱老人の生きがいに関する研究」
日本看護科学会誌, 9 (2) ,21~28
武田 徹 1997 「生きがい論の陥穽」 講談社
鏝 幹八郎 1999 「アイデンティティ」 日本評論社
鏝 幹八郎 2002 「アイデンティティとライフサイクル論」 ナカニシヤ出版
近松 門左衛門 1987 「源氏冷泉節」 近松全集刊行会
鶴田 一郎 1999 「間主観カウンセリング」 (～「生きがい」の心理学～)
西日本法規出版

(U)

- 植田 智・吉森 護・有倉 己幸 1992 「ハッピネスに関する心理学的 (2)」
広島大学教育学部紀要, (4 1) ,36

(W)

- 和田 修一 1990 「老人の幸福感」 東大出版会 p 150
和田 秀樹 1995 「2つの intersubjectivity, ストロロウとオグデン」 イ
マーゴ 6 (5) 、244~245
和田 実 1995 「青年の自己開示と心理的幸福感の関係」 社会心理学研

(Y)

山下 宏明 1980 「太平記」 講談社

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 1982 「認知された自己の諸側面の構造」 教育心理学研究, 30, 64~68

吉森 護 1992 「ハッピネスに関する心理学的研究(1)」
広島大学教育学部紀要, (41), 25~34

資料

(資料) 性差の t 検定

グループ統計量

性別		N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
自分への信頼	1	112	24.29	5.881	.556
	2	140	23.81	5.942	.502
他人への信頼	1	112	35.11	6.808	.643
	2	140	33.99	7.046	.595
不信	1	112	35.97	9.818	.928
	2	140	35.24	9.310	.787
生きがい感	1	112	93.54	23.480	2.219
	2	140	92.01	22.929	1.938
現状満足	1	112	20.28	5.966	.564
	2	140	19.69	6.006	.508
人生享楽	1	112	13.49	3.307	.312
	2	140	13.62	3.078	.260
存在価値	1	112	35.80	9.503	.898
	2	140	35.25	9.386	.793
意欲	1	112	23.97	7.438	.703
	2	140	23.46	7.205	.609
本来感	1	112	23.73	5.980	.565
	2	140	22.04	5.716	.483
自尊感情	1	112	29.63	8.186	.774
	2	140	28.14	8.940	.756

独立サンプルの検定

	2 つの母平均の差の検定		2 つの母平均の差の検定		
	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差
自分への信頼	.650	250	.516	.488	.750
他人への信頼	1.274	250	.204	1.121	.880
不信	.610	250	.542	.738	1.209
生きがい感	.521	250	.603	1.530	2.938
現状満足	.779	250	.437	.591	.759
人生享楽	-.323	250	.747	-.130	.403
存在価値	.463	250	.644	.554	1.196
意欲	.557	250	.578	.516	.927
本来感	2.284	250	.023	1.689	.740
自尊感情	1.357	250	.176	1.482	1.092

(資料) 各対処方略の「現実と希望のズレと一致」と各従属変数の関係
(一元配置の分散分析後の Tukey 法による多重比較のデータ)

信因子 1 = 自分への信頼

信因子 2 = 他人への信頼

信因子 3 = 不信

生き因子 1 = 現状満足

生き因子 2 = 人生享樂

生き因子 3 = 存在価値

生き因子 4 = 意欲

< 肯定的解釈 > の場合

多重比較

Tukey HSD

						95% 信頼区間	
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限	上限
従属変数	(I)	(J) 群 1					
信因子 1	11	12	-1.035	.979	.716	-3.57	1.50
		21	-1.613	1.017	.389	-4.24	1.02
		22	-6.360*	.814	.000	-8.46	-4.26
	12	11	1.035	.979	.716	-1.50	3.57
		21	-.578	1.141	.958	-3.53	2.37
		22	-5.325*	.964	.000	-7.82	-2.83
	21	11	1.613	1.017	.389	-1.02	4.24
		12	.578	1.141	.958	-2.37	3.53
		22	-4.747*	1.003	.000	-7.34	-2.15
	22	11	6.360*	.814	.000	4.26	8.46
		12	5.325*	.964	.000	2.83	7.82
		21	4.747*	1.003	.000	2.15	7.34
信因子 2	11	12	-2.389	1.136	.155	-5.33	.55
		21	-2.350	1.181	.195	-5.40	.70
		22	-8.066*	.945	.000	-10.51	-5.62

	12	11	2.389	1.136	.155	-.55	5.33
		21	.039	1.325	1.000	-3.39	3.47
		22	-5.677*	1.120	.000	-8.57	-2.78
	21	11	2.350	1.181	.195	-.70	5.40
		12	-.039	1.325	1.000	-3.47	3.39
		22	-5.716*	1.165	.000	-8.73	-2.70
	22	11	8.066*	.945	.000	5.62	10.51
		12	5.677*	1.120	.000	2.78	8.57
		21	5.716*	1.165	.000	2.70	8.73
信因子 3	11	12	2.224	1.695	.556	-2.16	6.61
		21	.188	1.762	1.000	-4.37	4.74
		22	6.726*	1.409	.000	3.08	10.37
	12	11	-2.224	1.695	.556	-6.61	2.16
		21	-2.036	1.977	.732	-7.15	3.08
		22	4.503*	1.670	.037	.18	8.82
	21	11	-.188	1.762	1.000	-4.74	4.37
		12	2.036	1.977	.732	-3.08	7.15
		22	6.539*	1.738	.001	2.04	11.03
	22	11	-6.726*	1.409	.000	-10.37	-3.08
		12	-4.503*	1.670	.037	-8.82	-.18
		21	-6.539*	1.738	.001	-11.03	-2.04
生因子 1	11	12	-1.294	.975	.546	-3.82	1.23
		21	-2.400	1.013	.086	-5.02	.22
		22	-6.912*	.810	.000	-9.01	-4.82
	12	11	1.294	.975	.546	-1.23	3.82
		21	-1.106	1.137	.765	-4.05	1.84
		22	-5.618*	.961	.000	-8.10	-3.13
	21	11	2.400	1.013	.086	-.22	5.02
		12	1.106	1.137	.765	-1.84	4.05
		22	-4.512*	1.000	.000	-7.10	-1.93
	22	11	6.912*	.810	.000	4.82	9.01
		12	5.618*	.961	.000	3.13	8.10

		21	4. 512*	1. 000	. 000	1. 93	7. 10
生因子 2	11	12	-1. 426*	. 548	. 048	-2. 84	. 00
		21	-1. 238	. 569	. 133	-2. 71	. 23
		22	-3. 041*	. 455	. 000	-4. 22	-1. 86
	12	11	1. 426*	. 548	. 048	. 01	2. 84
		21	. 189	. 639	. 991	-1. 46	1. 84
		22	-1. 615*	. 540	. 016	-3. 01	-. 22
	21	11	1. 238	. 569	. 133	-. 23	2. 71
		12	-. 189	. 639	. 991	-1. 84	1. 46
		22	-1. 803*	. 561	. 008	-3. 26	-. 35
	22	11	3. 041*	. 455	. 000	1. 86	4. 22
		12	1. 615*	. 540	. 016	. 22	3. 01
		21	1. 803*	. 561	. 008	. 35	3. 26
生因子 3	11	12	-2. 788	1. 617	. 314	-6. 97	1. 40
		21	-2. 913	1. 681	. 309	-7. 26	1. 43
		22	-9. 047*	1. 344	. 000	-12. 52	-5. 57
	12	11	2. 788	1. 617	. 314	-1. 40	6. 97
		21	-. 125	1. 886	1. 000	-5. 00	4. 75
		22	-6. 260*	1. 594	. 001	-10. 38	-2. 14
	21	11	2. 913	1. 681	. 309	-1. 43	7. 26
		12	. 125	1. 886	1. 000	-4. 75	5. 00
		22	-6. 135*	1. 658	. 002	-10. 42	-1. 85
	22	11	9. 047*	1. 344	. 000	5. 57	12. 52
		12	6. 260*	1. 594	. 001	2. 14	10. 38
		21	6. 135*	1. 658	. 002	1. 85	10. 42
生因子 4	11	12	-2. 000	1. 218	. 357	-5. 15	1. 15
		21	-2. 600	1. 266	. 171	-5. 87	. 67
		22	-7. 869*	1. 013	. 000	-10. 49	-5. 25
	12	11	2. 000	1. 218	. 357	-1. 15	5. 15
		21	-. 600	1. 421	. 975	-4. 27	3. 07
		22	-5. 869*	1. 200	. 000	-8. 97	-2. 76
	21	11	2. 600	1. 266	. 171	-. 67	5. 87

		12	. 600	1. 421	. 975	-3. 07	4. 27
		22	-5. 269*	1. 249	. 000	-8. 50	-2. 04
	22	11	7. 869*	1. 013	. 000	5. 25	10. 49
		12	5. 869*	1. 200	. 000	2. 76	8. 97
		21	5. 269*	1. 249	. 000	2. 04	8. 50
本来計	11	12	- . 233	1. 026	. 996	-2. 89	2. 42
		21	-2. 350	1. 066	. 125	-5. 11	. 41
		22	-4. 863*	. 853	. 000	-7. 07	-2. 66
	12	11	. 233	1. 026	. 996	-2. 42	2. 89
		21	-2. 117	1. 196	. 290	-5. 21	. 98
		22	-4. 630*	1. 011	. 000	-7. 24	-2. 02
	21	11	2. 350	1. 066	. 125	- . 41	5. 11
		12	2. 117	1. 196	. 290	- . 98	5. 21
		22	-2. 513	1. 051	. 082	-5. 23	. 21
	22	11	4. 863*	. 853	. 000	2. 66	7. 07
		12	4. 630*	1. 011	. 000	2. 02	7. 24
		21	2. 513	1. 051	. 082	- . 21	5. 23
自尊計	11	12	-1. 074	1. 526	. 896	-5. 02	2. 87
		21	-3. 013	1. 586	. 231	-7. 12	1. 09
		22	-6. 645*	1. 269	. 000	-9. 93	-3. 36
	12	11	1. 074	1. 526	. 896	-2. 87	5. 02
		21	-1. 939	1. 780	. 696	-6. 54	2. 67
		22	-5. 572*	1. 504	. 001	-9. 46	-1. 68
	21	11	3. 013	1. 586	. 231	-1. 09	7. 12
		12	1. 939	1. 780	. 696	-2. 67	6. 54
		22	-3. 633	1. 565	. 096	-7. 68	. 41
	22	11	6. 645*	1. 269	. 000	3. 36	9. 93
		12	5. 572*	1. 504	. 001	1. 68	9. 46
		21	3. 633	1. 565	. 096	- . 41	7. 68

<カタルシス>の場合

多重比較

Tukey HSD

						95% 信頼区間	
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限	上限
従属変数	(I)	群 2 (J) 群 2					
信因子 1	11	12	.474	1.284	.983	-2.85	3.79
		21	-1.410	1.011	.504	-4.03	1.21
		22	-2.607*	.905	.022	-4.95	-.27
	12	11	-.474	1.284	.983	-3.79	2.85
		21	-1.884	1.339	.496	-5.35	1.58
		22	-3.081	1.261	.072	-6.34	.18
	21	11	1.410	1.011	.504	-1.21	4.03
		12	1.884	1.339	.496	-1.58	5.35
		22	-1.197	.982	.615	-3.74	1.34
	22	11	2.607*	.905	.022	.27	4.95
		12	3.081	1.261	.072	-.18	6.34
		21	1.197	.982	.615	-1.34	3.74
信因子 2	11	12	-2.081	1.465	.488	-5.87	1.71
		21	-3.385*	1.154	.019	-6.37	-.40
		22	-5.313*	1.033	.000	-7.98	-2.64
	12	11	2.081	1.465	.488	-1.71	5.87
		21	-1.304	1.527	.828	-5.25	2.65
		22	-3.232	1.438	.114	-6.95	.49
	21	11	3.385*	1.154	.019	.40	6.37
		12	1.304	1.527	.828	-2.65	5.25
		22	-1.927	1.120	.315	-4.82	.97
	22	11	5.313*	1.033	.000	2.64	7.98
		12	3.232	1.438	.114	-.49	6.95
		21	1.927	1.120	.315	-.97	4.82
信因子 3	11	12	-.958	2.102	.968	-6.39	4.48
	21	.691	1.656	.975	-3.59	4.97	

		22	2.116	1.482	.483	-1.72	5.95
	12	11	.958	2.102	.968	-4.48	6.39
		21	1.649	2.191	.876	-4.02	7.32
		22	3.074	2.063	.445	-2.26	8.41
	21	11	-.691	1.656	.975	-4.97	3.59
		12	-1.649	2.191	.876	-7.32	4.02
		22	1.425	1.607	.812	-2.73	5.58
	22	11	-2.116	1.482	.483	-5.95	1.72
		12	-3.074	2.063	.445	-8.41	2.26
		21	-1.425	1.607	.812	-5.58	2.73
生因子 1	11	12	-1.331	1.308	.739	-4.71	2.05
		21	-2.080	1.030	.184	-4.75	.59
		22	-2.456*	.922	.041	-4.84	-.07
	12	11	1.331	1.308	.739	-2.05	4.71
		21	-.749	1.364	.947	-4.28	2.78
		22	-1.124	1.284	.818	-4.45	2.20
	21	11	2.080	1.030	.184	-.59	4.75
		12	.749	1.364	.947	-2.78	4.28
		22	-.376	1.000	.982	-2.96	2.21
	22	11	2.456*	.922	.041	.07	4.84
		12	1.124	1.284	.818	-2.20	4.45
		21	.376	1.000	.982	-2.21	2.96
生因子 2	11	12	.107	.684	.999	-1.66	1.88
		21	-1.148	.539	.147	-2.54	.25
		22	-1.690*	.482	.003	-2.94	-.44
	12	11	-.107	.684	.999	-1.88	1.66
		21	-1.255	.713	.296	-3.10	.59
		22	-1.797*	.672	.039	-3.53	-.06
	21	11	1.148	.539	.147	-.25	2.54
		12	1.255	.713	.296	-.59	3.10
		22	-.542	.523	.728	-1.90	.81
	22	11	1.690*	.482	.003	.44	2.94

		12	1. 797*	. 672	. 039	. 06	3. 53
		21	. 542	. 523	. 728	-. 81	1. 90
生因子 3	11	12	-1. 578	2. 023	. 863	-6. 81	3. 65
		21	-3. 403	1. 594	. 145	-7. 53	. 72
		22	-5. 787*	1. 427	. 000	-9. 48	-2. 10
	12	11	1. 578	2. 023	. 863	-3. 65	6. 81
		21	-1. 825	2. 109	. 823	-7. 28	3. 63
		22	-4. 209	1. 986	. 150	-9. 35	. 93
	21	11	3. 403	1. 594	. 145	-. 72	7. 53
		12	1. 825	2. 109	. 823	-3. 63	7. 28
		22	-2. 384	1. 547	. 414	-6. 39	1. 62
	22	11	5. 787*	1. 427	. 000	2. 10	9. 48
		12	4. 209	1. 986	. 150	-. 93	9. 35
		21	2. 384	1. 547	. 414	-1. 62	6. 39
生因子 4	11	12	1. 068	1. 604	. 910	-3. 08	5. 22
		21	-1. 285	1. 263	. 739	-4. 55	1. 98
		22	-1. 957	1. 131	. 310	-4. 88	. 97
	12	11	-1. 068	1. 604	. 910	-5. 22	3. 08
		21	-2. 353	1. 672	. 496	-6. 68	1. 97
		22	-3. 025	1. 575	. 222	-7. 10	1. 05
	21	11	1. 285	1. 263	. 739	-1. 98	4. 55
		12	2. 353	1. 672	. 496	-1. 97	6. 68
		22	-. 672	1. 226	. 947	-3. 84	2. 50
	22	11	1. 957	1. 131	. 310	-. 97	4. 88
		12	3. 025	1. 575	. 222	-1. 05	7. 10
		21	. 672	1. 226	. 947	-2. 50	3. 84
本来計	11	12	. 789	1. 296	. 929	-2. 56	4. 14
		21	. 524	1. 021	. 956	-2. 12	3. 17
		22	-1. 109	. 914	. 619	-3. 47	1. 26
	12	11	-. 789	1. 296	. 929	-4. 14	2. 56
		21	-. 265	1. 352	. 997	-3. 76	3. 23
		22	-1. 898	1. 273	. 444	-5. 19	1. 39

	21	11	-.524	1.021	.956	-3.17	2.12
		12	.265	1.352	.997	-3.23	3.76
		22	-1.633	.991	.354	-4.20	.93
	22	11	1.109	.914	.619	-1.26	3.47
		12	1.898	1.273	.444	-1.39	5.19
		21	1.633	.991	.354	-.93	4.20
	自尊計	11	2.419	1.877	.571	-2.44	7.27
		21	-2.144	1.479	.469	-5.97	1.68
		22	-2.773	1.324	.157	-6.20	.65
		12	-2.419	1.877	.571	-7.27	2.44
		21	-4.563	1.957	.094	-9.62	.50
		22	-5.192*	1.843	.027	-9.96	-.43
		21	2.144	1.479	.469	-1.68	5.97
		12	4.563	1.957	.094	-.50	9.62
		22	-.629	1.435	.972	-4.34	3.08
	22	11	2.773	1.324	.157	-.65	6.20
		12	5.192*	1.843	.027	.43	9.96
		21	.629	1.435	.972	-3.08	4.34

<回避的思考>の場合

多重比較

Tukey HSD

						95% 信頼区間	
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限	上限
従属変数	(I)	群 3 (J) 群 3					
信因子 1	11	12	1.807	1.141	.390	-1.14	4.76
		21	-1.268	1.063	.632	-4.02	1.48
		22	-1.252	.919	.524	-3.63	1.13
	12	11	-1.807	1.141	.390	-4.76	1.14
		21	-3.075	1.239	.065	-6.28	.13
		22	-3.059*	1.117	.033	-5.95	-.17
	21	11	1.268	1.063	.632	-1.48	4.02

		12	3.075	1.239	.065	-.13	6.28
		22	.016	1.038	1.000	-2.67	2.70
	22	11	1.252	.919	.524	-1.13	3.63
		12	3.059*	1.117	.033	.17	5.95
		21	-.016	1.038	1.000	-2.70	2.67
信因子 2	11	12	-.166	1.338	.999	-3.63	3.29
		21	-2.366	1.247	.232	-5.59	.86
		22	-3.089*	1.078	.023	-5.88	-.30
	12	11	.166	1.338	.999	-3.29	3.63
		21	-2.200	1.452	.430	-5.96	1.56
		22	-2.923	1.310	.118	-6.31	.47
	21	11	2.366	1.247	.232	-.86	5.59
		12	2.200	1.452	.430	-1.56	5.96
		22	-.723	1.218	.934	-3.87	2.43
	22	11	3.089*	1.078	.023	.30	5.88
		12	2.923	1.310	.118	-.47	6.31
		21	.723	1.218	.934	-2.43	3.87
信因子 3	11	12	-.257	1.852	.999	-5.05	4.53
		21	3.488	1.726	.183	-.98	7.95
		22	1.915	1.492	.574	-1.94	5.77
	12	11	.257	1.852	.999	-4.53	5.05
		21	3.745	2.011	.247	-1.46	8.95
		22	2.172	1.814	.629	-2.52	6.86
	21	11	-3.488	1.726	.183	-7.95	.98
		12	-3.745	2.011	.247	-8.95	1.46
		22	-1.573	1.686	.787	-5.93	2.79
	22	11	-1.915	1.492	.574	-5.77	1.94
		12	-2.172	1.814	.629	-6.86	2.52
		21	1.573	1.686	.787	-2.79	5.93
生因子 1	11	12	.255	1.135	.996	-2.68	3.19
		21	-2.885*	1.058	.034	-5.62	-.15
		22	-3.110*	.915	.004	-5.48	-.74

	12	11	-.255	1.135	.996	-3.19	2.68
		21	-3.140	1.233	.055	-6.33	.05
		22	-3.365*	1.112	.014	-6.24	-.49
	21	11	2.885*	1.058	.034	.15	5.62
		12	3.140	1.233	.055	-.05	6.33
		22	-.225	1.034	.996	-2.90	2.45
	22	11	3.110*	.915	.004	.74	5.48
		12	3.365*	1.112	.014	.49	6.24
		21	.225	1.034	.996	-2.45	2.90
生因子 2	11	12	.300	.609	.961	-1.27	1.87
		21	-.560	.567	.757	-2.03	.91
		22	-1.465*	.491	.016	-2.73	-.20
	12	11	-.300	.609	.961	-1.87	1.27
		21	-.860	.661	.563	-2.57	.85
		22	-1.765*	.596	.018	-3.31	-.22
	21	11	.560	.567	.757	-.91	2.03
		12	.860	.661	.563	-.85	2.57
		22	-.905	.554	.362	-2.34	.53
	22	11	1.465*	.491	.016	.20	2.73
		12	1.765*	.596	.018	.22	3.31
		21	.905	.554	.362	-.53	2.34
生因子 3	11	12	1.932	1.800	.706	-2.72	6.59
		21	-3.138	1.678	.243	-7.48	1.20
		22	-3.804*	1.451	.046	-7.56	-.05
	12	11	-1.932	1.800	.706	-6.59	2.72
		21	-5.070*	1.955	.049	-10.13	-.01
		22	-5.736*	1.764	.007	-10.30	-1.17
	21	11	3.138	1.678	.243	-1.20	7.48
		12	5.070*	1.955	.049	.01	10.13
		22	-.666	1.639	.977	-4.90	3.57
	22	11	3.804*	1.451	.046	.05	7.56
		12	5.736*	1.764	.007	1.17	10.30

		21	.666	1.639	.977	-3.57	4.90
生因子 4	11	12	1.779	1.395	.580	-1.83	5.39
		21	-2.701	1.301	.164	-6.07	.66
		22	-2.502	1.125	.119	-5.41	.41
	12	11	-1.779	1.395	.580	-5.39	1.83
		21	-4.480*	1.515	.018	-8.40	-.56
		22	-4.281*	1.367	.010	-7.82	-.75
	21	11	2.701	1.301	.164	-.66	6.07
		12	4.480*	1.515	.018	.56	8.40
		22	.199	1.270	.999	-3.09	3.48
	22	11	2.502	1.125	.119	-.41	5.41
		12	4.281*	1.367	.010	.75	7.82
		21	-.199	1.270	.999	-3.48	3.09
本来計	11	12	1.601	1.116	.478	-1.28	4.49
		21	-2.584	1.040	.065	-5.27	.11
		22	-2.224	.899	.067	-4.55	.10
	12	11	-1.601	1.116	.478	-4.49	1.28
		21	-4.185*	1.211	.004	-7.32	-1.05
		22	-3.825*	1.093	.003	-6.65	-1.00
	21	11	2.584	1.040	.065	-.11	5.27
		12	4.185*	1.211	.004	1.05	7.32
		22	.360	1.016	.985	-2.27	2.99
	22	11	2.224	.899	.067	-.10	4.55
		12	3.825*	1.093	.003	1.00	6.65
		21	-.360	1.016	.985	-2.99	2.27
自尊計	11	12	1.425	1.665	.827	-2.88	5.73
		21	-3.530	1.552	.107	-7.54	.48
		22	-1.692	1.342	.589	-5.16	1.78
	12	11	-1.425	1.665	.827	-5.73	2.88
		21	-4.955*	1.808	.033	-9.63	-.28
		22	-3.117	1.631	.226	-7.34	1.10
	21	11	3.530	1.552	.107	-.48	7.54

	12	4.955*	1.808	.033	.28	9.63
	22	1.838	1.516	.619	-2.08	5.76
22	11	1.692	1.342	.589	-1.78	5.16
	12	3.117	1.631	.226	-1.10	7.34
	21	-1.838	1.516	.619	-5.76	2.08

<気晴らし>の場合

多重比較

Tukey HSD

						95% 信頼区間	
従属変数	(I) 群 4 (J) 群 4		平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限	上限
信因子 1	11	12	.382	1.068	.984	-2.38	3.15
		21	-.569	1.253	.969	-3.81	2.67
		22	-2.963*	.889	.005	-5.26	-.66
	12	11	-.382	1.068	.984	-3.15	2.38
		21	-.951	1.334	.892	-4.40	2.50
		22	-3.345*	1.000	.005	-5.93	-.76
	21	11	.569	1.253	.969	-2.67	3.81
		12	.951	1.334	.892	-2.50	4.40
		22	-2.394	1.195	.189	-5.48	.70
	22	11	2.963*	.889	.005	.66	5.26
		12	3.345*	1.000	.005	.76	5.93
		21	2.394	1.195	.189	-.70	5.48
信因子 2	11	12	-2.667	1.219	.130	-5.82	.49
		21	-1.089	1.430	.872	-4.79	2.61
		22	-5.579*	1.015	.000	-8.20	-2.95
	12	11	2.667	1.219	.130	-.49	5.82
		21	1.578	1.522	.728	-2.36	5.52
		22	-2.912	1.141	.055	-5.86	.04
	21	11	1.089	1.430	.872	-2.61	4.79
		12	-1.578	1.522	.728	-5.52	2.36

		22	-4.490*	1.364	.006	-8.02	-.96
	22	11	5.579*	1.015	.000	2.95	8.20
		12	2.912	1.141	.055	-.04	5.86
		21	4.490*	1.364	.006	.96	8.02
信因子 3	11	12	1.681	1.738	.768	-2.82	6.18
		21	2.911	2.038	.483	-2.36	8.18
		22	4.878*	1.447	.005	1.14	8.62
	12	11	-1.681	1.738	.768	-6.18	2.82
		21	1.231	2.170	.942	-4.38	6.84
		22	3.197	1.627	.204	-1.01	7.41
	21	11	-2.911	2.038	.483	-8.18	2.36
		12	-1.231	2.170	.942	-6.84	4.38
		22	1.967	1.944	.743	-3.06	6.99
	22	11	-4.878*	1.447	.005	-8.62	-1.14
		12	-3.197	1.627	.204	-7.41	1.01
		21	-1.967	1.944	.743	-6.99	3.06
生因子 1	11	12	-.359	1.101	.988	-3.21	2.49
		21	-.688	1.290	.951	-4.03	2.65
		22	-2.351	.916	.053	-4.72	.02
	12	11	.359	1.101	.988	-2.49	3.21
		21	-.329	1.374	.995	-3.88	3.22
		22	-1.992	1.030	.217	-4.66	.67
	21	11	.688	1.290	.951	-2.65	4.03
		12	.329	1.374	.995	-3.22	3.88
		22	-1.663	1.231	.531	-4.85	1.52
	22	11	2.351	.916	.053	-.02	4.72
		12	1.992	1.030	.217	-.67	4.66
		21	1.663	1.231	.531	-1.52	4.85
生因子 2	11	12	-.103	.563	.998	-1.56	1.35
		21	.341	.660	.955	-1.37	2.05
		22	-2.000*	.468	.000	-3.21	-.79
	12	11	.103	.563	.998	-1.35	1.56

		21	.444	.702	.922	-1.37	2.26
		22	-1.897*	.527	.002	-3.26	-.53
	21	11	-.341	.660	.955	-2.05	1.37
		12	-.444	.702	.922	-2.26	1.37
		22	-2.341*	.629	.001	-3.97	-.71
	22	11	2.000*	.468	.000	.79	3.21
		12	1.897*	.527	.002	.53	3.26
		21	2.341*	.629	.001	.71	3.97
生因子 3	11	12	-.325	1.703	.998	-4.73	4.08
		21	.151	1.996	1.000	-5.01	5.31
		22	-4.941*	1.417	.003	-8.61	-1.28
	12	11	.325	1.703	.998	-4.08	4.73
		21	.476	2.125	.996	-5.02	5.97
		22	-4.617*	1.594	.021	-8.74	-.49
	21	11	-.151	1.996	1.000	-5.31	5.01
		12	-.476	2.125	.996	-5.97	5.02
		22	-5.092*	1.904	.040	-10.02	-.17
	22	11	4.941*	1.417	.003	1.28	8.61
		12	4.617*	1.594	.021	.49	8.74
		21	5.092*	1.904	.040	.17	10.02
生因子 4	11	12	.135	1.323	1.000	-3.29	3.56
		21	-.645	1.551	.976	-4.66	3.37
		22	-3.659*	1.101	.006	-6.51	-.81
	12	11	-.135	1.323	1.000	-3.56	3.29
		21	-.780	1.652	.965	-5.05	3.49
		22	-3.793*	1.238	.013	-7.00	-.59
	21	11	.645	1.551	.976	-3.37	4.66
		12	.780	1.652	.965	-3.49	5.05
		22	-3.014	1.480	.177	-6.84	.81
	22	11	3.659*	1.101	.006	.81	6.51
		12	3.793*	1.238	.013	.59	7.00
		21	3.014	1.480	.177	-.81	6.84

本来計	11	12	-.145	1.062	.999	-2.89	2.60
		21	-2.926	1.245	.090	-6.15	.29
		22	-3.153*	.884	.002	-5.44	-.87
	12	11	.145	1.062	.999	-2.60	2.89
		21	-2.781	1.325	.156	-6.21	.65
		22	-3.008*	.994	.014	-5.58	-.44
	21	11	2.926	1.245	.090	-.29	6.15
		12	2.781	1.325	.156	-.65	6.21
		22	-.227	1.187	.998	-3.30	2.84
	22	11	3.153*	.884	.002	.87	5.44
		12	3.008*	.994	.014	.44	5.58
		21	.227	1.187	.998	-2.84	3.30
自尊計	11	12	2.095	1.589	.552	-2.02	6.21
		21	-.853	1.864	.968	-5.67	3.97
		22	-1.796	1.323	.527	-5.22	1.63
	12	11	-2.095	1.589	.552	-6.21	2.02
		21	-2.948	1.984	.448	-8.08	2.18
		22	-3.891*	1.488	.046	-7.74	-.04
	21	11	.853	1.864	.968	-3.97	5.67
		12	2.948	1.984	.448	-2.18	8.08
		22	-.943	1.777	.952	-5.54	3.65
	22	11	1.796	1.323	.527	-1.63	5.22
		12	3.891*	1.488	.046	.04	7.74
		21	.943	1.777	.952	-3.65	5.54

<計画立案>の場合

多重比較

Tukey HSD

従属変数 (I) 群 5 (J) 群 5			95% 信頼区間			
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限 上限
信因子 1	11	12	-.715	.968	.882	-3.22 1.79

		21		-.496	1.281	.980	-3.81	2.82
		22		-4.149*	.882	.000	-6.43	-1.87
	12	11		.715	.968	.882	-1.79	3.22
		21		.219	1.323	.998	-3.20	3.64
		22		-3.434*	.941	.002	-5.87	-1.00
	21	11		.496	1.281	.980	-2.82	3.81
		12		-.219	1.323	.998	-3.64	3.20
		22		-3.654*	1.261	.021	-6.92	-.39
	22	11		4.149*	.882	.000	1.87	6.43
		12		3.434*	.941	.002	1.00	5.87
		21		3.654*	1.261	.021	.39	6.92
信因子 2	11	12		-2.699	1.149	.090	-5.67	.27
		21		-1.192	1.520	.862	-5.12	2.74
		22		-4.779*	1.046	.000	-7.48	-2.07
	12	11		2.699	1.149	.090	-.27	5.67
		21		1.507	1.570	.772	-2.55	5.57
		22		-2.080	1.117	.247	-4.97	.81
	21	11		1.192	1.520	.862	-2.74	5.12
		12		-1.507	1.570	.772	-5.57	2.55
		22		-3.587	1.496	.080	-7.46	.28
	22	11		4.779*	1.046	.000	2.07	7.48
		12		2.080	1.117	.247	-.81	4.97
		21		3.587	1.496	.080	-.28	7.46
信因子 3	11	12		.173	1.600	1.000	-3.97	4.31
		21		-4.640	2.118	.129	-10.12	.84
		22		2.761	1.457	.233	-1.01	6.53
	12	11		-.173	1.600	1.000	-4.31	3.97
		21		-4.813	2.187	.126	-10.47	.84
		22		2.588	1.555	.345	-1.43	6.61
	21	11		4.640	2.118	.129	-.84	10.12
		12		4.813	2.187	.126	-.84	10.47
		22		7.401*	2.084	.003	2.01	12.79

	22	11	-2.761	1.457	.233	-6.53	1.01
		12	-2.588	1.555	.345	-6.61	1.43
		21	-7.401*	2.084	.003	-12.79	-2.01
生因子 1	11	12	-1.299	1.009	.571	-3.91	1.31
		21	.689	1.335	.955	-2.76	4.14
		22	-2.688*	.918	.019	-5.06	-.31
	12	11	1.299	1.009	.571	-1.31	3.91
		21	1.989	1.378	.474	-1.58	5.55
		22	-1.389	.980	.490	-3.92	1.15
	21	11	-.689	1.335	.955	-4.14	2.76
		12	-1.989	1.378	.474	-5.55	1.58
		22	-3.378	1.313	.052	-6.77	.02
	22	11	2.688*	.918	.019	.31	5.06
		12	1.389	.980	.490	-1.15	3.92
		21	3.378	1.313	.052	-.02	6.77
生因子 2	11	12	-.875	.538	.365	-2.27	.52
		21	.384	.711	.949	-1.46	2.22
		22	-1.232	.489	.060	-2.50	.03
	12	11	.875	.538	.365	-.52	2.27
		21	1.259	.735	.318	-.64	3.16
		22	-.357	.523	.903	-1.71	.99
	21	11	-.384	.711	.949	-2.22	1.46
		12	-1.259	.735	.318	-3.16	.64
		22	-1.616	.700	.099	-3.43	.19
	22	11	1.232	.489	.060	-.03	2.50
		12	.357	.523	.903	-.99	1.71
		21	1.616	.700	.099	-.19	3.43
生因子 3	11	12	-3.883	1.533	.057	-7.85	.08
		21	-1.760	2.028	.822	-7.01	3.49
		22	-7.544*	1.395	.000	-11.15	-3.93
	12	11	3.883	1.533	.057	-.08	7.85
		21	2.123	2.095	.742	-3.29	7.54

		22	-3.661	1.490	.069	-7.51	.19
	21	11	1.760	2.028	.822	-3.49	7.01
		12	-2.123	2.095	.742	-7.54	3.29
		22	-5.784*	1.996	.021	-10.95	-.62
	22	11	7.544*	1.395	.000	3.93	11.15
		12	3.661	1.490	.069	-.19	7.51
		21	5.784*	1.996	.021	.62	10.95
生因子 4	11	12	-1.799	1.186	.429	-4.87	1.27
		21	-.382	1.569	.995	-4.44	3.68
		22	-5.664*	1.079	.000	-8.46	-2.87
	12	11	1.799	1.186	.429	-1.27	4.87
		21	1.417	1.620	.818	-2.77	5.61
		22	-3.865*	1.152	.005	-6.85	-.88
	21	11	.382	1.569	.995	-3.68	4.44
		12	-1.417	1.620	.818	-5.61	2.77
		22	-5.282*	1.544	.004	-9.28	-1.29
	22	11	5.664*	1.079	.000	2.87	8.46
		12	3.865*	1.152	.005	.88	6.85
		21	5.282*	1.544	.004	1.29	9.28
本来計	11	12	-1.594	.983	.368	-4.14	.95
		21	-.922	1.301	.893	-4.29	2.44
		22	-3.536*	.895	.001	-5.85	-1.22
	12	11	1.594	.983	.368	-.95	4.14
		21	.672	1.343	.959	-2.80	4.15
		22	-1.942	.955	.179	-4.41	.53
	21	11	.922	1.301	.893	-2.44	4.29
		12	-.672	1.343	.959	-4.15	2.80
		22	-2.614	1.280	.176	-5.92	.70
	22	11	3.536*	.895	.001	1.22	5.85
		12	1.942	.955	.179	-.53	4.41
		21	2.614	1.280	.176	-.70	5.92
自尊計	11	12	-1.402	1.451	.769	-5.15	2.35

	21		-.579	1.920	.990	-5.54	4.39
	22		-4.463*	1.321	.005	-7.88	-1.05
12	11		1.402	1.451	.769	-2.35	5.15
	21		.823	1.982	.976	-4.30	5.95
	22		-3.061	1.410	.134	-6.71	.59
21	11		.579	1.920	.990	-4.39	5.54
	12		-.823	1.982	.976	-5.95	4.30
	22		-3.884	1.889	.171	-8.77	1.00
22	11		4.463*	1.321	.005	1.05	7.88
	12		3.061	1.410	.134	-.59	6.71
	21		3.884	1.889	.171	-1.00	8.77

<情報収集>の場合

多重比較

Tukey HSD

従属変数 (I) 群 6 (J) 群 6						95% 信頼区間	
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限	上限
信因子 1	11	12	.171	1.131	.999	-2.75	3.10
		21	.028	1.199	1.000	-3.07	3.13
		22	-2.491*	.894	.029	-4.80	-.18
	12	11	-.171	1.131	.999	-3.10	2.75
		21	-.143	1.329	1.000	-3.58	3.30
		22	-2.662	1.062	.061	-5.41	.08
	21	11	-.028	1.199	1.000	-3.13	3.07
		12	.143	1.329	1.000	-3.30	3.58
		22	-2.519	1.135	.121	-5.45	.42
	22	11	2.491*	.894	.029	.18	4.80
		12	2.662	1.062	.061	-.08	5.41
		21	2.519	1.135	.121	-.42	5.45
信因子 2	11	12	-.578	1.311	.971	-3.97	2.81
		21	-1.307	1.391	.784	-4.91	2.29

		22	-4.151*	1.037	.000	-6.83	-1.47
	12	11	.578	1.311	.971	-2.81	3.97
		21	-.729	1.542	.965	-4.72	3.26
		22	-3.573*	1.232	.021	-6.76	-.39
	21	11	1.307	1.391	.784	-2.29	4.91
		12	.729	1.542	.965	-3.26	4.72
		22	-2.844	1.317	.137	-6.25	.56
	22	11	4.151*	1.037	.000	1.47	6.83
		12	3.573*	1.232	.021	.39	6.76
		21	2.844	1.317	.137	-.56	6.25
信因子 3	11	12	.072	1.855	1.000	-4.73	4.87
		21	.934	1.968	.965	-4.16	6.02
		22	2.216	1.467	.433	-1.58	6.01
	12	11	-.072	1.855	1.000	-4.87	4.73
		21	.862	2.181	.979	-4.78	6.50
		22	2.144	1.742	.608	-2.36	6.65
	21	11	-.934	1.968	.965	-6.02	4.16
		12	-.862	2.181	.979	-6.50	4.78
		22	1.282	1.862	.901	-3.53	6.10
	22	11	-2.216	1.467	.433	-6.01	1.58
		12	-2.144	1.742	.608	-6.65	2.36
		21	-1.282	1.862	.901	-6.10	3.53
生因子 1	11	12	-1.106	1.142	.768	-4.06	1.85
		21	-.663	1.211	.947	-3.80	2.47
		22	-3.096*	.903	.004	-5.43	-.76
	12	11	1.106	1.142	.768	-1.85	4.06
		21	.443	1.342	.988	-3.03	3.91
		22	-1.990	1.072	.250	-4.76	.78
	21	11	.663	1.211	.947	-2.47	3.80
		12	-.443	1.342	.988	-3.91	3.03
		22	-2.433	1.146	.149	-5.40	.53
	22	11	3.096*	.903	.004	.76	5.43

		12	1.990	1.072	.250	-.78	4.76
		21	2.433	1.146	.149	-.53	5.40
生因子 2	11	12	-1.007	.602	.341	-2.57	.55
		21	-.821	.639	.573	-2.47	.83
		22	-1.911*	.476	.000	-3.14	-.68
	12	11	1.007	.602	.341	-.55	2.57
		21	.186	.708	.994	-1.65	2.02
		22	-.904	.566	.382	-2.37	.56
	21	11	.821	.639	.573	-.83	2.47
		12	-.186	.708	.994	-2.02	1.65
		22	-1.090	.605	.275	-2.65	.47
	22	11	1.911*	.476	.000	.68	3.14
		12	.904	.566	.382	-.56	2.37
		21	1.090	.605	.275	-.47	2.65
生因子 3	11	12	-.440	1.754	.994	-4.98	4.10
		21	-.654	1.861	.985	-5.47	4.16
		22	-6.197*	1.387	.000	-9.78	-2.61
	12	11	.440	1.754	.994	-4.10	4.98
		21	-.214	2.062	1.000	-5.55	5.12
		22	-5.757*	1.647	.003	-10.02	-1.50
	21	11	.654	1.861	.985	-4.16	5.47
		12	.214	2.062	1.000	-5.12	5.55
		22	-5.543*	1.761	.010	-10.10	-.99
	22	11	6.197*	1.387	.000	2.61	9.78
		12	5.757*	1.647	.003	1.50	10.02
		21	5.543*	1.761	.010	.99	10.10
生因子 4	11	12	-.302	1.396	.996	-3.91	3.31
		21	.793	1.482	.950	-3.04	4.62
		22	-3.003*	1.104	.035	-5.86	-.15
	12	11	.302	1.396	.996	-3.31	3.91
		21	1.095	1.642	.909	-3.15	5.34
		22	-2.700	1.311	.170	-6.09	.69

	21	11	- . 793	1. 482	. 950	-4. 62	3. 04
		12	-1. 095	1. 642	. 909	-5. 34	3. 15
		22	-3. 795*	1. 402	. 036	-7. 42	- . 17
	22	11	3. 003*	1. 104	. 035	. 15	5. 86
		12	2. 700	1. 311	. 170	- . 69	6. 09
		21	3. 795*	1. 402	. 036	. 17	7. 42
本来計	11	12	- . 270	1. 132	. 995	-3. 20	2. 66
		21	-1. 237	1. 201	. 732	-4. 34	1. 87
		22	-2. 456*	. 895	. 033	-4. 77	- . 14
	12	11	. 270	1. 132	. 995	-2. 66	3. 20
		21	- . 967	1. 331	. 887	-4. 41	2. 48
		22	-2. 186	1. 063	. 171	-4. 94	. 56
	21	11	1. 237	1. 201	. 732	-1. 87	4. 34
		12	. 967	1. 331	. 887	-2. 48	4. 41
		22	-1. 219	1. 136	. 706	-4. 16	1. 72
	22	11	2. 456*	. 895	. 033	. 14	4. 77
		12	2. 186	1. 063	. 171	- . 56	4. 94
		21	1. 219	1. 136	. 706	-1. 72	4. 16
自尊計	11	12	- . 762	1. 656	. 968	-5. 05	3. 52
		21	-2. 738	1. 757	. 404	-7. 28	1. 81
		22	-3. 887*	1. 310	. 017	-7. 27	- . 50
	12	11	. 762	1. 656	. 968	-3. 52	5. 05
		21	-1. 976	1. 947	. 741	-7. 01	3. 06
		22	-3. 125	1. 555	. 187	-7. 15	. 90
	21	11	2. 738	1. 757	. 404	-1. 81	7. 28
		12	1. 976	1. 947	. 741	-3. 06	7. 01
		22	-1. 148	1. 662	. 901	-5. 45	3. 15
	22	11	3. 887*	1. 310	. 017	. 50	7. 27
		12	3. 125	1. 555	. 187	- . 90	7. 15
		21	1. 148	1. 662	. 901	-3. 15	5. 45

<放棄・諦め>の場合

多重比較

Tukey HSD

従属変数 (I) 群 7 (J) 群 7						95% 信頼区間	
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限	上限
信因子 1	11	12	1.598	1.059	.434	-1.14	4.34
		21	2.814	1.177	.082	-.23	5.86
		22	.652	.897	.886	-1.67	2.97
	12	11	-1.598	1.059	.434	-4.34	1.14
		21	1.216	1.327	.796	-2.22	4.65
		22	-.946	1.086	.820	-3.75	1.86
	21	11	-2.814	1.177	.082	-5.86	.23
		12	-1.216	1.327	.796	-4.65	2.22
		22	-2.162	1.201	.276	-5.27	.94
	22	11	-.652	.897	.886	-2.97	1.67
		12	.946	1.086	.820	-1.86	3.75
		21	2.162	1.201	.276	-.94	5.27
信因子 2	11	12	1.913	1.247	.419	-1.31	5.14
		21	2.818	1.386	.179	-.77	6.40
		22	1.998	1.056	.234	-.73	4.73
	12	11	-1.913	1.247	.419	-5.14	1.31
		21	.905	1.562	.938	-3.14	4.95
		22	.085	1.278	1.000	-3.22	3.39
	21	11	-2.818	1.386	.179	-6.40	.77
		12	-.905	1.562	.938	-4.95	3.14
		22	-.821	1.414	.938	-4.48	2.84
	22	11	-1.998	1.056	.234	-4.73	.73
		12	-.085	1.278	1.000	-3.39	3.22
		21	.821	1.414	.938	-2.84	4.48
信因子 3	11	12	.402	1.706	.995	-4.01	4.81
		21	-1.971	1.896	.726	-6.87	2.93
		22	-3.394	1.444	.090	-7.13	.34

	12	11	-.402	1.706	.995	-4.81	4.01
		21	-2.373	2.136	.683	-7.90	3.15
		22	-3.796	1.748	.134	-8.32	.72
	21	11	1.971	1.896	.726	-2.93	6.87
		12	2.373	2.136	.683	-3.15	7.90
		22	-1.423	1.934	.883	-6.42	3.58
	22	11	3.394	1.444	.090	-.34	7.13
		12	3.796	1.748	.134	-.72	8.32
		21	1.423	1.934	.883	-3.58	6.42
	生因子 1	11	.815	1.085	.876	-1.99	3.62
		21	-.409	1.206	.987	-3.53	2.71
		22	-.030	.918	1.000	-2.41	2.35
	12	11	-.815	1.085	.876	-3.62	1.99
		21	-1.224	1.359	.804	-4.74	2.29
		22	-.845	1.112	.872	-3.72	2.03
	21	11	.409	1.206	.987	-2.71	3.53
		12	1.224	1.359	.804	-2.29	4.74
		22	.379	1.230	.990	-2.80	3.56
	22	11	.030	.918	1.000	-2.35	2.41
		12	.845	1.112	.872	-2.03	3.72
		21	-.379	1.230	.990	-3.56	2.80
生因子 2	11	12	.348	.575	.931	-1.14	1.84
		21	.318	.640	.959	-1.34	1.97
		22	.560	.487	.659	-.70	1.82
	12	11	-.348	.575	.931	-1.84	1.14
		21	-.029	.721	1.000	-1.89	1.83
		22	.213	.590	.984	-1.31	1.74
	21	11	-.318	.640	.959	-1.97	1.34
		12	.029	.721	1.000	-1.83	1.89
		22	.242	.652	.983	-1.45	1.93
	22	11	-.560	.487	.659	-1.82	.70
		12	-.213	.590	.984	-1.74	1.31

		21		-. 242	. 652	. 983	-1. 93	1. 45
生因子 3	11	12		1. 109	1. 675	. 911	-3. 22	5. 44
		21		5. 604*	1. 862	. 015	. 79	10. 42
		22		3. 157	1. 418	. 119	-. 51	6. 82
	12	11		-1. 109	1. 675	. 911	-5. 44	3. 22
		21		4. 495	2. 098	. 143	-. 93	9. 92
		22		2. 048	1. 716	. 632	-2. 39	6. 49
	21	11		-5. 604*	1. 862	. 015	-10. 42	-. 79
		12		-4. 495	2. 098	. 143	-9. 92	. 93
		22		-2. 447	1. 899	. 571	-7. 36	2. 46
	22	11		-3. 157	1. 418	. 119	-6. 82	. 51
		12		-2. 048	1. 716	. 632	-6. 49	2. 39
		21		2. 447	1. 899	. 571	-2. 46	7. 36
生因子 4	11	12		1. 772	1. 300	. 524	-1. 59	5. 13
		21		4. 123*	1. 445	. 024	. 39	7. 86
		22		2. 496	1. 101	. 108	-. 35	5. 34
	12	11		-1. 772	1. 300	. 524	-5. 13	1. 59
		21		2. 352	1. 628	. 473	-1. 86	6. 56
		22		. 724	1. 332	. 948	-2. 72	4. 17
	21	11		-4. 123*	1. 445	. 024	-7. 86	-. 39
		12		-2. 352	1. 628	. 473	-6. 56	1. 86
		22		-1. 627	1. 474	. 687	-5. 44	2. 19
	22	11		-2. 496	1. 101	. 108	-5. 34	. 35
		12		-. 724	1. 332	. 948	-4. 17	2. 72
		21		1. 627	1. 474	. 687	-2. 19	5. 44
本来計	11	12		-. 304	1. 061	. 992	-3. 05	2. 44
		21		1. 414	1. 179	. 628	-1. 64	4. 46
		22		1. 251	. 898	. 505	-1. 07	3. 57
	12	11		. 304	1. 061	. 992	-2. 44	3. 05
		21		1. 719	1. 329	. 568	-1. 72	5. 16
		22		1. 555	1. 087	. 482	-1. 26	4. 37
	21	11		-1. 414	1. 179	. 628	-4. 46	1. 64

自尊計	12		-1.719	1.329	.568	-5.16	1.72
	22		-.163	1.203	.999	-3.27	2.95
	22	11	-1.251	.898	.505	-3.57	1.07
	12		-1.555	1.087	.482	-4.37	1.26
	21		.163	1.203	.999	-2.95	3.27
	11	12	-.054	1.529	1.000	-4.01	3.90
	21		5.678*	1.699	.005	1.28	10.07
	22		1.770	1.294	.521	-1.58	5.12
	12	11	.054	1.529	1.000	-3.90	4.01
	21		5.733*	1.915	.016	.78	10.69
	22		1.824	1.567	.650	-2.23	5.88
	21	11	-5.678*	1.699	.005	-10.07	-1.28
	12		-5.733*	1.915	.016	-10.69	-.78
	22		-3.909	1.733	.112	-8.39	.57
	22	11	-1.770	1.294	.521	-5.12	1.58
	12		-1.824	1.567	.650	-5.88	2.23
	21		3.909	1.733	.112	-.57	8.39

<責任転嫁>の場合

多重比較

Tukey HSD

						95% 信頼区間	
			平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	下限	上限
従属変数	(I)	群 8 (J) 群 8					
信因子 1	11	12	1.441	1.123	.575	-1.46	4.35
		21	1.022	1.063	.771	-1.73	3.77
		22	.800	.943	.831	-1.64	3.24
	12	11	-1.441	1.123	.575	-4.35	1.46
		21	-.419	1.327	.989	-3.85	3.01
		22	-.641	1.233	.954	-3.83	2.55
	21	11	-1.022	1.063	.771	-3.77	1.73
		12	.419	1.327	.989	-3.01	3.85

		22	-.222	1.178	.998	-3.27	2.83
	22	11	-.800	.943	.831	-3.24	1.64
		12	.641	1.233	.954	-2.55	3.83
		21	.222	1.178	.998	-2.83	3.27
信因子 2	11	12	.991	1.310	.874	-2.40	4.38
		21	2.171	1.240	.300	-1.04	5.38
		22	2.531	1.100	.101	-.31	5.38
	12	11	-.991	1.310	.874	-4.38	2.40
		21	1.180	1.548	.871	-2.82	5.18
		22	1.540	1.438	.708	-2.18	5.26
	21	11	-2.171	1.240	.300	-5.38	1.04
		12	-1.180	1.548	.871	-5.18	2.82
		22	.360	1.374	.994	-3.19	3.91
	22	11	-2.531	1.100	.101	-5.38	.31
		12	-1.540	1.438	.708	-5.26	2.18
		21	-.360	1.374	.994	-3.91	3.19
信因子 3	11	12	-2.207	1.762	.594	-6.77	2.35
		21	-3.848	1.668	.099	-8.16	.47
		22	-5.720*	1.480	.001	-9.55	-1.89
	12	11	2.207	1.762	.594	-2.35	6.77
		21	-1.641	2.082	.860	-7.03	3.74
		22	-3.513	1.935	.268	-8.52	1.49
	21	11	3.848	1.668	.099	-.47	8.16
		12	1.641	2.082	.860	-3.74	7.03
		22	-1.872	1.849	.742	-6.65	2.91
	22	11	5.720*	1.480	.001	1.89	9.55
		12	3.513	1.935	.268	-1.49	8.52
		21	1.872	1.849	.742	-2.91	6.65
生因子 1	11	12	.631	1.140	.946	-2.32	3.58
		21	-.809	1.078	.877	-3.60	1.98
		22	.326	.957	.986	-2.15	2.80
	12	11	-.631	1.140	.946	-3.58	2.32

		21	-1.439	1.346	.709	-4.92	2.04
		22	-.304	1.251	.995	-3.54	2.93
	21	11	.809	1.078	.877	-1.98	3.60
		12	1.439	1.346	.709	-2.04	4.92
		22	1.135	1.195	.778	-1.96	4.23
	22	11	-.326	.957	.986	-2.80	2.15
		12	.304	1.251	.995	-2.93	3.54
		21	-1.135	1.195	.778	-4.23	1.96
生因子 2	11	12	.477	.605	.859	-1.09	2.04
		21	-.275	.573	.963	-1.76	1.21
		22	-.005	.508	1.000	-1.32	1.31
	12	11	-.477	.605	.859	-2.04	1.09
		21	-.752	.715	.719	-2.60	1.10
		22	-.482	.664	.887	-2.20	1.24
	21	11	.275	.573	.963	-1.21	1.76
		12	.752	.715	.719	-1.10	2.60
		22	.270	.635	.974	-1.37	1.91
	22	11	.005	.508	1.000	-1.31	1.32
		12	.482	.664	.887	-1.24	2.20
		21	-.270	.635	.974	-1.91	1.37
生因子 3	11	12	2.360	1.782	.548	-2.25	6.97
		21	2.889	1.686	.319	-1.47	7.25
		22	2.671	1.496	.283	-1.20	6.54
	12	11	-2.360	1.782	.548	-6.97	2.25
		21	.529	2.104	.994	-4.91	5.97
		22	.310	1.956	.999	-4.75	5.37
	21	11	-2.889	1.686	.319	-7.25	1.47
		12	-.529	2.104	.994	-5.97	4.91
		22	-.218	1.869	.999	-5.05	4.62
	22	11	-2.671	1.496	.283	-6.54	1.20
		12	-.310	1.956	.999	-5.37	4.75
		21	.218	1.869	.999	-4.62	5.05

生因子 4	11	12	1.541	1.382	.681	-2.03	5.11
		21	2.036	1.307	.405	-1.35	5.42
		22	2.052	1.160	.291	-.95	5.05
	12	11	-1.541	1.382	.681	-5.11	2.03
		21	.495	1.632	.990	-3.73	4.72
		22	.511	1.517	.987	-3.41	4.43
	21	11	-2.036	1.307	.405	-5.42	1.35
		12	-.495	1.632	.990	-4.72	3.73
		22	.016	1.449	1.000	-3.73	3.76
	22	11	-2.052	1.160	.291	-5.05	.95
		12	-.511	1.517	.987	-4.43	3.41
		21	-.016	1.449	1.000	-3.76	3.73
本来計	11	12	.865	1.111	.864	-2.01	3.74
		21	2.541	1.051	.076	-.18	5.26
		22	.770	.932	.842	-1.64	3.18
	12	11	-.865	1.111	.864	-3.74	2.01
		21	1.676	1.312	.578	-1.72	5.07
		22	-.095	1.219	1.000	-3.25	3.06
	21	11	-2.541	1.051	.076	-5.26	.18
		12	-1.676	1.312	.578	-5.07	1.72
		22	-1.770	1.165	.427	-4.78	1.24
	22	11	-.770	.932	.842	-3.18	1.64
		12	.095	1.219	1.000	-3.06	3.25
		21	1.770	1.165	.427	-1.24	4.78
自尊計	11	12	1.459	1.636	.809	-2.77	5.69
		21	2.881	1.548	.248	-1.12	6.88
		22	1.253	1.373	.798	-2.30	4.81
	12	11	-1.459	1.636	.809	-5.69	2.77
		21	1.421	1.932	.883	-3.58	6.42
		22	-.206	1.795	.999	-4.85	4.44
	21	11	-2.881	1.548	.248	-6.88	1.12
		12	-1.421	1.932	.883	-6.42	3.58

	22	-1. 627	1. 716	. 779	-6. 06	2. 81
22	11	-1. 253	1. 373	. 798	-4. 81	2. 30
	12	. 206	1. 795	. 999	-4. 44	4. 85
	21	1. 627	1. 716	. 779	-2. 81	6. 06